

内分泌学と犯罪学の基礎知識

(Nociónes Fundamentales de Endocrinología y Criminología)

サマエル・アウン・ベオール著

序文 (英語版)

現代医学は、内分泌学、すなわち人体の腺を研究する科学の先端に位置する。

肉体は、霊を結集する乗り物である。そして神秘家にとっては、すばらしい実験室である。読者が本書を研究する際、そのすばらしい実験室を利用して、学習内容を実践にうつすとよい。理解できない事があれば、本を閉じて、別の日にもう一度研究しなさい。そのたびに、よりよい情報を受け取るだろう。普通のありふれた人間は、自分の乗り物の奴隷であるばかりか、その奴隷であることを楽しむのである。

人間は、肉体・生命体・アストラル体・メンタル体・意志体・霊 (神聖霊)・魂という七つの真実の体を持つ。前述のいくつかの体を支配したとき、研究可能な他の高次元の体がいくつかある。生命体は肉体と似ている。多くの病気がこの体から生じ、肉体に医療を施してもほとんど成果がなく、医師たちは病気の治療に失敗する。病気は、分子からなる体に反映する。一般に、医学のマスターたちが仕事を行うために、内的世界のアルデン (Alden) 寺院に運ばれるのは生命体である。そうして驚くべき結果が得られる。

普通のありふれた人間のアストラル体は、薄もやのようにほんやりとしている。だが、創造エネルギーを活用する人のアストラル体は、光輝いている。ノーシスの叡智の全著作で教えられるそれ。天上の複数の体の色と似ている明るい色ゆえに、それはアストラル体と呼ばれる。この乗り物は、信じられない速度でトリップする。幽体離脱のために、帰依者は自分の内なる父、内なる存在にたとえば次のように呼びかけるとよい。「親愛なる父よ、あなたに懇願し、求めます。アルデン寺院に私を運んでください。」子が自分の行きたいところに連れていかれたときの肉体の父と同じように、内なる父も振る舞う。もし危険がなければ、父は子の求めたところに彼を連れて行く。

医学はメンタル体をより一層研究してきた。間違いを精神病のごとく扱う心理学者たちがいるが、彼らはそれを肉体を通して治療しようとし、ほとんど効果はない。野菜ジュースを使うエレメンタル療法によって植物のエレメンタル (精霊) を利用し、よりよい治療を行えるのである。

意志体 — 我々がそれを知り支配するとき、父の意志が天に行われているように地にも行える

ようになる。これが成しとげられないうちは、人間は神を自分自身の意志で作らねば、かって放題に神に求め、命令する。大多数の人において、霊の体は「心理的我」の中にびん詰めになされている。ノーシスの学習と共に、人間は真実の人を解放し、不思議なわざを行う。人と名づけられる、すべてを支配する聖なるコイン、または聖魂の体。

メンタル体 — 読者に次のような話をしよう。メンタル体を治療するために実践魔術を行わねばならなかった、数千例にのぼる体験の一つである。大西洋岸の隣り町の一つで、十四歳くらいの一少女の両親に呼ばれた。この家族の家には、ノーシス・センターがあった。少女は闇の実体たちに攻撃され、精神錯乱を引き起こし、栄養失調に陥っていた。それゆえに、我々は精神的にも肉体的にも、二つの領域で治療しなければならなかった。

近所の人たちで、家はごった返していた。なぜなら少女はおしゃべりで、ノスティックたちについて、そして家の中にはノーシス・センターがあるのでノスティックたちが家ですべてについて何にもまして話したからである。少女の話すことは、家の持ち主に対してとても偏見を抱いていた隣人たちの興味のみであった。病気の少女を静かにさせるために、我々はつる植物の儀式を行い、その口を封じ静めるようエレメンタルに願った。同時に、このつる植物の葉を一枚とって、バナナの繊維でそれを包み、その葉のように口を閉ざし静かにするよう病気の少女に命じた。これにはすばらしい効果があり、近所の人たちはおとなしく家を去った。もう広めるうわさ話はないのだから。十五日後、娘がどうしても合図だけで意志の伝達をしようとしていたの

で、両親は驚いた。我々はもう一度そこに行き、少女のために繊維で包んだつたの葉を出してくれるよう求め、それを開け、そして少女に再び話をさせるようエレメンタルに頼んだ。このとき、少女の狂気は去った。つたのエレメンタルは内的な仕事を行い、病気を治療し、外面的には少女にはビタミンとタン白質で栄養価を高くした食物が与えられた。

今言ったような話が掲載されている多くの本を、我々は書くことができた。だが、最も重要なことは、わが親愛なる読者よ、あなたが「思考と言葉と行動において純粹、純潔そして神聖」になった後に、研究し、驚異を行えるということである。我々はすでにこの過程を終えてしまい、多くの人々のために働いている。今度は、あなたがこの哀れな苦しむ人類のために働き助ける番である。そのようにして、あなたは意識革命の三要素を助け、そのために働く。

今日の医学が、ひじょうに多くの腺の価値、理由、そして目的を、またこの内分泌学の論文で学習するすべての知識を知るとき、我々は大きな進歩を遂げるであろう。大学で医学を学ぶ若者がすでに多くいて、彼らは同時にノーシス学徒である。古い構造と衝突しないよう慎重であることが、彼らの義務である。第十章「脾臓」を精読し、この器官の重要性を理解しなさい。脾臓はアストラル・トリップおよび、日中肉体の中で蓄積するエネルギーの浪費と関係する。

ノーシスの叡智の学徒たちが神秘に関心を向けるように、自然界の四大要素ばかりでなく、すべてをみだしすべてを構成する（←要検討 indundates おそらくタイプの打ちまちがい）第五要素のエーテルをも活用するとき、我々の内部で何が起こるか見てみよう。何よりも、我々の惑星地球は今や水瓶座に入ったので、人間はエーテルを支配し、以前には知られていなかったとて

つもない速度でトリップするだろう。

我々自身の内部には、エーテル・空気・水・火・土という自然界の各要素が支配する部分がある。

エーテルは頭頂から眉間までの頭部を支配する。スタシヴァ (Sudashiva) はエーテルの神である。エーテルはアンタ (ポイント) という物質から構成される。アンタたちに命じ指図する許可をスタシヴァに求めて、エーテルのアンタたちを呼び出すことができる。アンタたちを呼ぶ際には、ため息をのぼしたようなマントラ「ハ」(HA)を発音する。学徒たちはもうご存じのように、これらの要素によって脳のセンターを浄化し、脳に命と力を与えることができる。情報の原因によって(←要検討 with cause of knowledge)記憶、インテレクト、感覚、さらには意識でさえも浄化できる。どのようにしてそれらをよりよく行うのか。脳・小脳・大脳・脊柱で働くようにアンタたちに命じることによって、である。エーテルは無線局の連絡放送網(ネットワーク)全体を支配し、チャクラは皆そこで機能する。

空気の要素の神はイーシュヴァラ (Ishara 自在天) である。我々はイーシュヴァラを呼び出し、シルフォ (Silpho 男の空気の精) とシルフィデたち (Silphede 女の空気の精) に命じ、指図することができる。彼らを呼ぶマントラは「ヤ」(YA) である。この要素は眉間から心臓上部までの部分を支配する。このようにして、その部分にある両腕を含めてすべての感覚を、そんな要素で向上させることができる。自然界の要素は純潔な者、精液をむだにせず性エネルギー変換の叡智を知っている者に従うにすぎない。眉間から心臓上部にかけて視覚・臭覚・味覚・聴覚・触覚の肉体の全感覚が位置する。これは、我々が肉体のこれらの部分をすっかり治療できる、ということの意味する。シルフォとシルフィデたちは、とても美しく、どのような男女でもより美しくすることができ、また他の多くのことを行える。けれども、創造エネルギーを最大限に利用するために、研究し活用せねばならない。

ルドラ (Rhudra) は、我々の内における火の要素の神である。火のサラマンドラたち (Salamandra) を呼ぶマントラは「ラ」(RA) である。RとAをのぼして発音する。「ルルラ——」(RRRRRRRAAAAAAAAA) 。火は心臓から肛門の高さまでを支配する。このようにして、その部分にある器官はすべて、火のサラマンドラたちによって命と力を与えられる。例をあげると、腸壁における油脂性物質のひどい汚染で苦しむ人は、サラマンドラたちにそのような物質で汚染された体を浄化してもらえるのである。火の神ルドラの援助によって体を治療することができる。

我々の内における水の神ナーラーヤナ (Narayana ^{ナラヤナ}) は、肛門から膝の部分を支配する。「ヴァ——」(VVVVVVVAAAAAAAA) のように、VとAをのぼして発音するマントラ「ヴァ」(VA) によって、オンディーヌ (Ondina) とネレイス (Nereida) たちを呼ぶ。オンディーヌとネレイスたちは、とても美しい存在である。水の精たちに命じ指図する方法を我々が知っているのであれば、彼らは我々を美しくし、体を浄化し、治療することができる。帰依者が家で入浴するとき、マントラ「ヴァ」を三度発音しながら、オンディーヌとネレイスたちに命じ

指図する恩寵を授けてくれるようナーラーヤナに願える。それからエレメンタルたちに自分の肉体の中に入り、命と力を与えるよう命じることができる。同時に力強い声で、または心の中でマントラ「クリム」(KLIM)を発音するとよい。このようにして、これらのエレメンタルたちを働かせるべきである。

土の要素の神ブラフマー (Brahma 梵天)。マントラ「ラ」(LA)によって土のノームたち (Gnomo) を呼び出し、命じることができる。ブラフマーは膝から足の裏までを支配する。ちょうどノームたちが人間にとって美しい石、貴金属を作りだし、あらゆる種類の食べ物を作りだすように、魔術師がノームたちを支配することを学ぶとき、彼に仕えることができる。

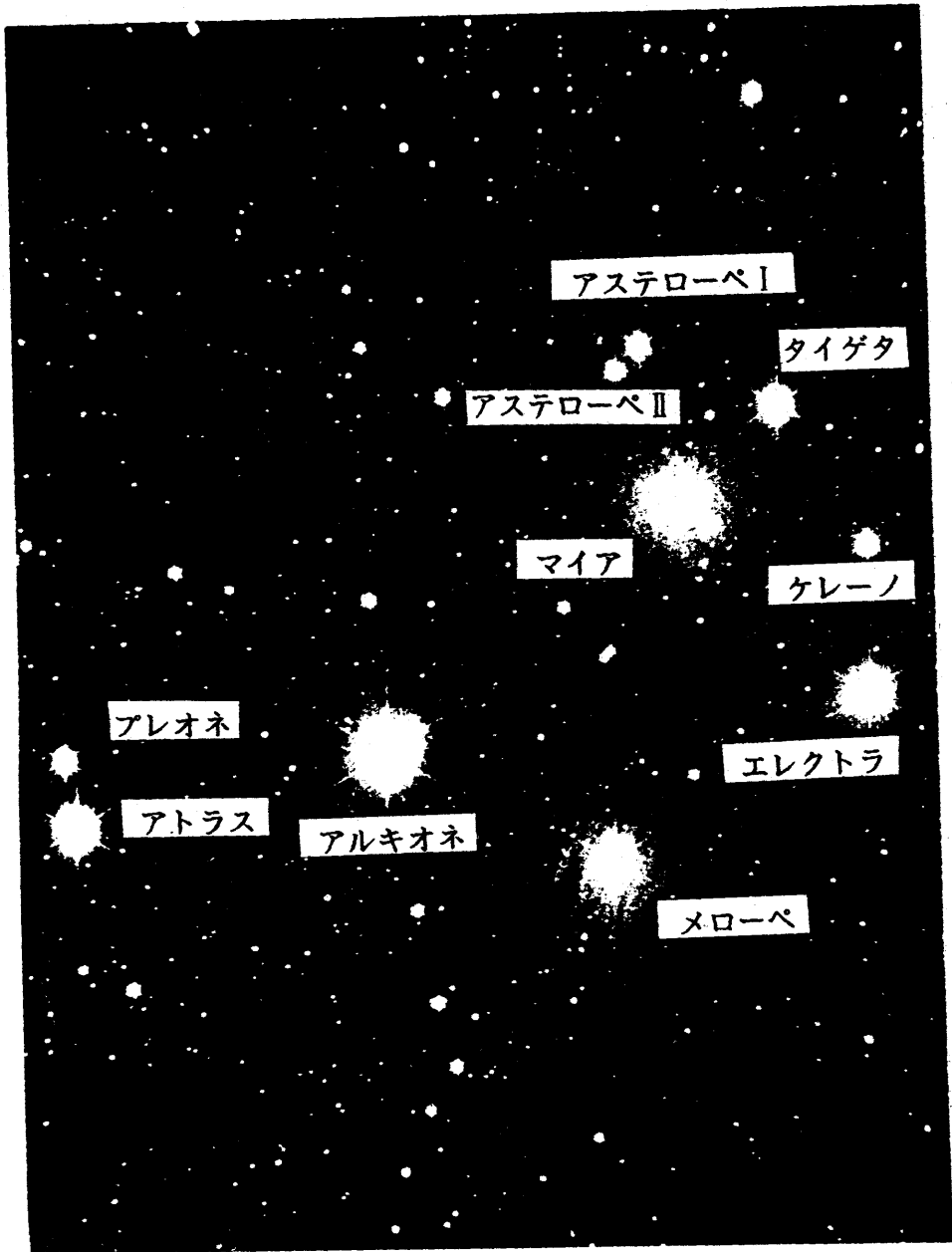
多くのノスティックたちは海辺に行くが、彼らは頭だけを外に出して砂の中に埋まり、土のノームたちと働き、エネルギーで自分を充電する。また海水にも入り、オンディーヌおよびネレイスたちと働く。ノスティックたちは水の上にとどまり、日の照り返しから発する火のサラマンドラたちと働く。海風を利用し、シルフォとシルフィデたちと働き、それらのエレメンタルたちと不思議なわざを行い、あお向けになって海面を漂う。エーテルのアンタたちを呼び出し、脳を根本的な力で充電する。

我々一人一人のインテレクトは欠点だらけのために無力である。そのことを知らずに、戦いと議論のために集まるよりも、サマエルの著作について話すためにその場にいると言うよりも、これらすべてのワーク(仕事)はずっとよい。我々がうそつきなら、感覚は我々を欺く。欠点は肉体的パーソナリティーに形を与える。我々は欠点の結果である。神はシンプル(単純)、他のすべてのものは複雑である。神を見いだすためにシンプルにならねばならない。うそつきは真理である父に対して罪を犯す、ということを忘れてはならない。「彼」はその者たちに、命であるすべてのものを支配し命令する叡智の恩寵を授けないであろう。

我々が科学を知るとき、食物もまた我々に力を与えてくれる。科学によって我々は、ごくわずかの栄養から最大限の力を引き出だせるのである。

土の産出する食物、その中で穀物と穀草は最も豊かである。穀物の多くの中に含まれている創造エネルギーを利用する許可を土の要素の神ブラフマーに求めることができる。同時に心の中か言葉に出して、マントラ「クリム」(KRIM)を発音する。食事中、マントラ「クリム」を発音しながら、このマントラによって食物に潜在するチャティ(Chatty)を抽出できる。チャティとは、それらの食物に含まれるクリスティック・エネルギーである。チャティのネガティブな部分は、チャーマ(Chama)と呼ばれる。多くの暴食者は食べに食べ、チャーマの状態から上昇しない。

* 五つの要素とのプラクティスは、『ニュース 89年5月号』のルーン・若返りヨガを参照して下さい。



プレアデス（すばる）とアルキオネ（アルシオン）

内分泌腺	ホルモン	化学的種類	生理作用	その他 (③多量産, ④大量産)	
					分腺
副腎皮質	成長ホルモン (STH)	タンパク質	骨・軟骨の発育を促進する	②巨人症 ③巨人症	
	甲状腺刺激ホルモン (TSH)	タンパク質	甲状腺の発育と分泌促進	③バセドウ病	
	副腎皮質刺激ホルモン (ACTH)	ポリペプチド	副腎皮質の発育と分泌を促進する	③ストレス	
	泌乳刺激ホルモン	タンパク質	乳腺発育と乳汁分泌促進 乳汁の分泌を促進する	③乳汁分泌停止 ④乳腺ホルモンと関連	
	生殖刺激ホルモン (FSH)	タンパク質	生殖腺・精子形成促進	③上位ホルモン ④卵巣・精巣の発育を支配する	
	黄体形成ホルモン (LH)	タンパク質	卵巣・黄体形成・精巣分泌を促進する		
	脂肪交代ホルモン		脂肪・炭水化物の燃焼を促進する	アドレナリン・副腎皮質ホルモンと関連	
	炭水化物交代ホルモン				
	中葉	インシュリン (MSH)	タンパク質	魚・両生類・爬虫類の色素化 細胞を弛緩し、体色変化	③視紅再生を促進する ④視覚を抑制する
	後葉	オキシトシン	ポリペプチド	子宮・消化管壁の筋収縮	③産産
甲状腺	パソパレシニン	ポリペプチド	細胞管の水分再吸収の促進	③高血圧 ④尿崩症	
	チロキシン	Iを含むアミノ酸	幼動物の成長と分化の促進 基礎代謝の上昇 カエルの変態の促進	③グレートン病、粘液性甲状腺腫、 ④バセドウ病 ⑤変態抑制 ⑥変態促進	
	(チロキシン)		CaとPの代謝、不足するとCaの著しい減少を起す	③チロニ一病 ④骨質性	
副腎皮質	パソパレシニン	タンパク質	糖の代謝に関係	③高血圧 ④リニ一病	
	糖質コルチコイド	ステロイド	Naの排出抑制、Kの排出促進、水分交代の調節	③ストレス病 ④アジソン病	
副腎皮質	無機質コルチコイド	ステロイド	交感神経と同じ作用 (血圧上昇、心き亢進、立毛など) 肝臓グリコゲンと血糖として放出	③糖尿病 ④血腫病 ⑤血腫病には、インシュリンと対抗的に働く	
	アドレナリン	アミノ酸誘導体		③高血圧	
ノルアドレナリン		上に同じ	血圧上昇	③高血圧	

内分泌腺	ホルモン	化学的種類	生理作用	その他 (①過多産, ②大量産)
ラングヘルマン島	インシュリン	タンパク質	血糖の酸化促進・肝臓における糖形成促進 血糖量の減少	①低血糖症 ②糖尿病
	ゴトニン		交感神経の緊張を緩和	インシュリンと同じ効果があり、より持続的
	カリクレイン		血圧の低下	
	グルカゴン		血糖量の増大	ラングヘルマン島の細胞より分泌
精巣	テストステロン (雄性ホルモン)	ステロイド	男性特有の肉体的精神的発達を上げさせる	①中性化
	エストロゲン (雌性ホルモン)	ステロイド	子宮発育促進・乳腺発育促進・月経促進・発情亢進 女性特有の二次性徴発現	①中性化
卵巣	プロゲステロン (黄体ホルモン)	ステロイド	子宮粘膜炎増殖・受精卵着床準備、妊娠の経過を正常にし胎盤・乳腺の発育促進	流産を予防し、陣痛を抑制する
	胎盤	エストロゲン	女性生殖器官発育促進 性的成熟を促進 乳腺肥大・乳汁分泌促進	
胃	ガストロリン	ヒスタミン様物質	胃液分泌促進	幽門部結核より分泌
	セクレチン	ポリペプチド	胆汁と胆汁の分泌促進	十二指腸結核より分泌
腸	インセクレチン		血糖を促進・ラングヘルマン島の刺激	
	じゅう毛ホルモン		癌突起の運動促進	
肝臓	抗凝血性ホルモン		造血作用促進	
	解毒ホルモン		各種有毒物質の解毒促進	
心臓	心臓ホルモン		心臓搏動振幅の増大	
	心臓		骨の発育・ストレスへの抵抗	
松果腺	松果腺	パロチニン	生殖腺の早熟抑制 心身の早熟抑制	幼年時に障害が起ると早熟、早熟成人症となる。前葉ホルモンと対抗的
	胸腺	胸腺ホルモン	身体・骨格・神経の発育を促進。生殖腺の発育調節 カエルの変態抑制	15才ごろ最大となり、以後漸次変性を起し消失する

第一章 松果腺

松果腺は、脳の後部に位置する。この小さな腺の長さは、わずか五ミリであり、きわめて重要な細かい砂で囲まれている。松果腺は、赤灰色の小さな組織である。このちっぼけな腺は、*生殖器と密接に関係している。松果腺は生殖器の発達・成長の全進行を抑制する、あるホルモンを分泌する。公式科学によって確認されたことであるが、このホルモンが生殖器の成熟というその目的を果たした後、松果腺はもはやホルモンを分泌できない、繊維の多い組織に退化する。この腺が霊の座であると、デカルトは確信していた。この腺が退化した第三の目であると、東洋人たちは確信する。この腺が脳の後部に位置する単なる赤灰色の小さな組織にすぎないことを西洋医学が発見したとき、西洋医学はデカルトと東洋人たちの主張を拒絶した。科学的教義を確立せず、すべての概念を折衷主義と教育的な形で研究する方がよかつただろう。

松果腺は、ある特別の訓練によって時空を越えた世界を知覚するためのブラフマーの窓、ダイヤモンドの目、ポリビジョンの目であると、インドのヨギたちは確信する。

西洋科学は、できるなら東洋ヨガのこれらの概念を研究すべきである。西洋科学が、すべてではない。東洋科学の研究も緊急に必要である。我々には総合的かつ完全な文化が必要である。

顕微鏡のおかげで無限に小さいものを客観的に知覚できるようになった。望遠鏡のおかげで無限に大きいものを見ることができるようになった。もし松果腺を通して万物の時空を越えた側面を見ることができたら、東洋ヨガを研究し、その驚異の腺を発達させるべきである。インドのヨギたちのプラクティスには、松果腺の特別の超常機能を開発するものがある。そのとき我々は超感覚的世界を知覚する。東洋ヨガのこれらの主張を否定することは、科学的ではない。研究・分析が必要である。

松果腺の力は性能力に左右されると、東洋の賢者たちは語る。今や純潔の科学的根拠を理解できるのである。

聖書に登場する大預言者たちは皆、偉大な松果腺開発者であったことは疑いない。あるプラクティスと組み合わせた科学的純潔によって、預言者たちは自然の超感覚的世界を見ることができた。

ノスティックたちは、松果腺には聖霊の原子があると言う。生物学は、これらすべてのことを研究する決心をした。東洋人たちは、松果腺には千弁の蓮華があると断言する。疑う余地なく、それは聖人たちの光輪である。

天才は、たいへん発達した松果腺をしている。白痴では松果腺が萎縮しているのが発見された。

インドではごくありふれた、大衆を魅惑する驚異的なわざは、本物のファキール（行者）のときのみ可能である。ファキールは、とても生命力にみちあふれた松果腺をしている。

内分泌腺の分泌液は、血液中に直接吸収される。血液は内分泌腺のすべての分泌液を他の器官や腺に運ぶ。すると、その器官や腺の機能は促進されてさらに活動し、より激しく働くのである。ホルモン（hormon）という言葉は、「刺激する」を意味するギリシア語の言葉に由来する。事実、ホルモンは全有機体を興奮させ、働かせる力を持っている。

内分泌腺の分泌液はマインドにも影響する。インド人がマインドの支配に専念する理由を今、我々は理解する。マインドを通してホルモン機能を抑制できるのである。

インドの賢者の中には、埋められても何ヶ月間も生きてままの者たちがいる。

生物学は、このことに無関心であることはできない。生物学者たちは、アジアのそれらすべての驚異を調査する必要がある。

イマヌエル・カント氏は、肉体に対して「ニスス・フォルマティウス」（nisus formativus）を認める。「ニスス・フォルマティウス」は交感神経系と液体神経系とに関係する流動的体であると、東洋の賢者たちは考える。その流動的体は、中世の医者たちの言うアストラル体であることは疑いない。アストラル体内には人間的マインド、およびそれらすべてのまったくの心霊的原理が存在する。

そのアストラル体の感覚^器は、内分泌腺の実質自体から咲き出でるハスの花のようである。インドのヨギたちが話題にする、あの千弁のハスはアストラル体の霊的感覚^器である。

松果腺の特別の発達によってアストラル体を知覚することができ、その霊的感覚^器は、ハスの花のように内分泌腺自体から生じる。医学は現象のしくみと戯れるが、生命の本質は知らない。松果腺が特別に発達すると、その生命の本質そのものを見ることができる。

第二章 脳下垂体

脳下垂体はたいへん小さい。生物学の語るところによれば、この腺の大きさはエンドウ豆しかなく、*蝶形骨の上に調和よく支えられて、脳の根幹自体から驚くべき方法で垂れ下がっている。この腺にはすばらしい三位一体が見いだされる。三角形の法則は、全被造物を支配する。

脳下垂体が三つの部分から成っているのは確かである。二つの葉とまんなかの部分、そして、ここに三角形がある。全創造のすばらしい法則。脳下垂体の前頭葉または前葉がなければ生命は絶対ありえないと、生物学者たちは考える。

前頭葉は細胞群 (cellular community) の構造の大きさを監視する役目を担っている。さて、この監視の中には抑制・調節も含まれていることを知るべきである。そうして初めて、前葉がなければ生命はありえないことを理解できる。

前葉の機能高進によって巨人が生まれる。前頭葉の機能が不十分なら小人になる。それゆえ脳下垂体は細胞群の構造の大きさを調節するので、前頭葉なしでは生命はありえないだろう、そう推測することは論理的である。

ある種の白痴と盲目も、前頭葉のなんらかの異常によるものである。

脳下垂体の後葉の機能も、有機体の不随意筋をすばらしく強健にすることである。脳下垂体の分泌液は、腎臓からの水の排せつにも影響をおよぼす。

＊

医師たちは難産を軽くするために脳下垂体を利用する。マスター H.P.ブラヴァツキーは、脳下垂体は松果腺の従者にして光を運ぶ者である、と語る。ベルリン大学医学教授クルム・ヘラー博士は、脳下垂体と松果腺の間には死体では既に消滅しているきわめて細い小管または毛細血管が存在することを語っていた。したがって、これら二つの腺はその細い管でつながっている。生物電気学と生体電磁氣的な力に関しては、なんら疑いの余地はない。それでは、脳下垂体と松果腺の間の生体電磁氣的な交換を認めようではないか。狂信・偏見・独断のない態度で、nustico な感覚 (注. 死語かミスアリ? 英語版では「神秘的感覚」、フランス語版では「感覚の領域」となっている) および心身相関のあらゆる可能性を検討するときが来た。

インドのヨギたちによれば、脳下垂体から二枚の花弁を持つハスの花が生まれるという。西洋の科学者たちはこれらの主張を笑う代わりに、深く研究するとよいのだが、知らないことを笑うのは科学的ではない。そのハスの花は、アストラル体のちょうど眉間にある。インドの賢者たちは、これらのハスの花にチャクラと名づけた。ヨギたちは、脳下垂体チャクラは我々を透視者にする、と確信する。ヴェーダの聖なる地には、透視力開発の秘密のアラクティスが数多くある。インド人たちによれば額チャクラには八種の大きな超能力と三十六の小さな超能力があるという。

種

透視者は自然の超感覚的世界を知覚できる。心霊的、精神的なすべての原理を含むアストラル体を霊視できる。透視者は四次元を知覚するのである。

生物学者は、腺のエネルギー論をばかにできない。松果腺と脳下垂体の生体電磁氣的な交換によって、我々は透視者になる。

銅の原子と脳下垂体の間には、なんらかの関係があるらしい。透視力の開発に銅を利用する賢者たちもいる。^{*}ノストラダムスは純粋な銅の容器の中の水をじっと見つめながら、まる数時間そ

のままだった。医者であるその賢者は、時を越えてまったく正確に成就した数々の予言を行った。占星術師たちは、脳下垂体は金星の影響を受け、銅も金星の影響を受けると確信する。そうして初めて、銅と脳下垂体の間に存在する密接な関係を理解できるのである。

＊

征服の時代、スペインから来たカトリックの司祭たちがアステカの神官の一団に遭遇したとき、おもしろいことが起こった。伝説によれば、カトリックの司祭たちはインディオたちに伝道しているとき、天使・大天使等のことを話した。それから、インディオの神官たちはカトリックの司祭たちを食事招待した。食べ物にまじってカトリックの司祭たちはとても美味しいサボテンを食べたと言われる。そのサボテンはスペインの司祭たちの透視力をたちどころに目覚めさせた。すると、彼らは天使・大天使等を見たのである。彼らの驚きは大変なもので、カトリックの司祭たちはどうしたらいいかわからなかった。そうこうする間にインディオたちは、にっこりしながら言った。「あなたたち、わしらに話してくれた天使らと大天使ら。わしら、ずいぶん前から知ってた。」

伝説によると、カトリックの司祭たちはアステカの神官たちをブルホ（妖術師）やエチセロ（魔法使い）とみなして殺させたという。疑いなく、そのサボテンは魔力を持っており、それを食べる者にたちまち透視力を目覚めさせる。そのサボテンとはペヨーテである。メヒコ州では透視力の目覚めに使えるペヨーテは手に入らない。手に入れたらチワワ州やサンルイスボトシ州で探すとよい。それをかむのである。熟したペヨーテだけが役立ち、かわいたものは役立たない。

生物学はペヨーテをあなどれないし、独断的かつ頑固な態度で透視による知覚は幻覚なのだと断言することもできない。それゆえ、顕微鏡で微生物を見ることのできた最初の賢人たちは、それらの微生物は存在せず、レンズを通して見ていたものは幻覚であると確信したかもしれない。その場合には、今でもまだ微生物の存在は知られていないのではないだろうか。我々はあまり教条的ではなく、もっと研究熱心で、さらに折衷主義かつ教育的である必要がある。脳下垂体は七種類のホルモンを分泌する。産科における脳下垂体の重要性は、測り知れない。

著名な作家ジョージ・アドウム（Jorge Adoum）博士は、ノーシス著述家にして白ロッジの大密儀の偉大なマスターである。彼は、コスミック・クリストの原子は脳下垂体にあり、父の原子は鼻のつけ根の磁気センターにあると語った。

生物学は賢者全員の科学的概念を検討・研究する。もはや生物学は18世紀の恐ろしい唯物論を脱し、今日、内分泌腺の肉体的、心霊的、精神的なすべての潜在能力を研究し始めている。

* 生殖器と密接に関係…淫乱は松果腺の腫ようを引き起こすことが証明されている。（仏語版の注より）

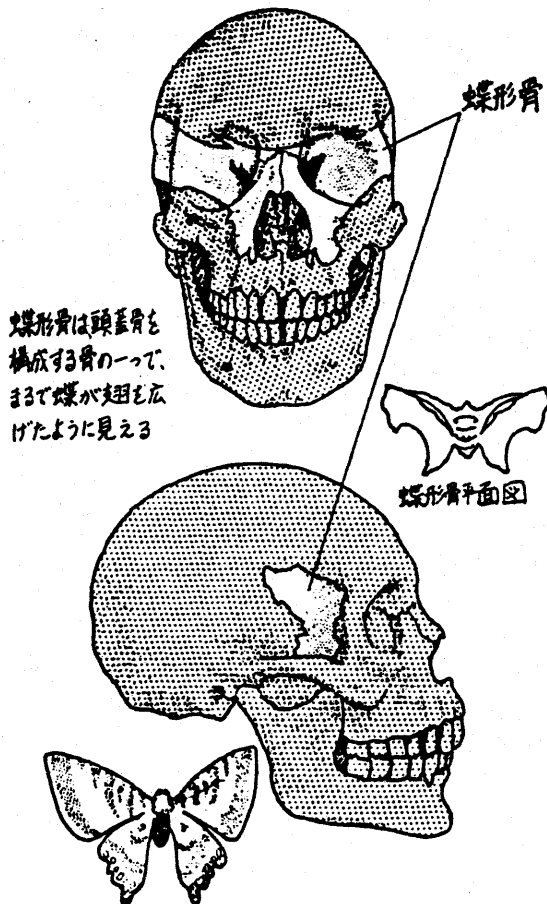
* 難産を軽くする…脳下垂体ホルモンの一つに子宮の平滑筋を収縮させる子宮収縮ホルモンのオキシトシンがある。(仏語版の注より)

* 蝶形骨…今月号『ニュース』のイラスト参照。
「下図を見よ」

* ノストラダムス (1503-86) …「深夜、秘密の書齋にひとり座る／それは真ちゅうの三脚台の上に／幽かな炎が空よりたちのぼり／みだりに信じてはならぬものを成就させる」(『諸世紀』1・1) 彼がイアンブリコス著『エジプトの秘儀』を読み、それを予言の土台に利用していたのは確実である。深夜、ひとり書齋にこもり、予言能力をかきたてる秘密の禁書に読みふける。真ちゅうの三脚台はイアンブリコスの用いていた道具で、その上に水を張った鉢をのせる。予言者が一心に凝視しつづけるうちに、ついに水面が曇り、未来の世界像が浮かびあがってくる。

「手にする杖を三脚台の真ん中に置く／衣服のヘリと足に水をふりかける／声が 恐怖が ガウンに包まれた身体が震える／こうごうしい光彩 神は在すかたわらに」(『諸世紀』1・2) 彼は細い杖で三脚台にさわり、ガウンと足を水で湿す。古代アポロンの神託をさずかろうと、女預言者たちが用いたのと同じ方法である。(エリカ・チータム著 山根和郎訳 二見書房 『ノストラダムス全予言』参考)

* 征服の時代…16世紀。アステカやインカなどをスペイン人征服者(コンキスタドール)たちが滅ぼした時代。



内分泌学と犯罪学の基礎知識

サマエル・アウン・ベオール著

第三章 甲状腺

甲状腺は美しい暗赤色をしており、それには内分泌専門医に非常によく知られている二つの葉がある。一つの驚くべき峽部（組織・器官の幅が狭くなっている部分）でうまく結合したそれら二つの美しい葉を観察して、生物学者は楽しむ。（ここに完全なる三角形がある。）

甲状腺の二つの葉は、喉ぼとけのちょうど両側に位置している。

甲状腺には、バセドウ病（甲状腺機能高進症）および甲状腺機能減退症という二種類の基本的な病気がある。前者の特徴が分泌過剰であるのに対して、後者のそれは分泌不足である。バセドウ病は外科で治療できるが、甲状腺機能減退症はどのような方法でも外科では治療できない。その病気の唯一の治療法は、患者にチロキシン（甲状腺分泌液の活性成分）を投与することである。実際、チロキシンは、医学ではごく重要なヨウ素化合物である。

チロキシンは人体の全般的な新陳代謝と密接に関係する。患者がバセドウ病で苦しむとき、チロキシンの分泌過剰により食物の燃焼が激増する。その結果、呼吸と心臓のリズムが正常よりも速くなる。

甲状腺機能減退症では新陳代謝はより遅くなる。もし子供がこの病気にかかれば、体と脳の全体的な発達がひどく遅れることになる。大人が発病すれば、精神的に無気力になり、爪と髪は遅く異常に伸び、どのような肉体的活動でも疲労困ばいし、皮膚は乾燥し、うろこ状になり、少し厚くなる。

生物のヨード（ヨウ素）が全有機体を殺菌・消毒する。甲状腺の生物的ヨードがなければ、人体は生きられないだろう。バラ十字団の医師たちが断言するには、甲状腺は金星の影響を受け副甲状腺は火星の影響を受けるといふ。著名な医師のベルリン大学医学教授アーノルド・クルム・ヘラーは、金星と火星の間にはある恐ろしい戦いがあり、それは甲状腺と副甲状腺の間でくりかえされると確言していた。

あるとき、読み書きのできない一人の農夫の老人が我々に確信をもって語ってくれたことであるが、彼は一枚の鉛板を患部に当てることによって甲状腺腫を自分で治療したという。農夫の話によれば、四角形の鉛板に小さな穴を二つあけて、糸や紐で結ぶ。その紐で鉛板を喉にしばりつけ、甲

甲状腺腫の根幹の上に鉛板を重ねあわせたままにしたという。三ヵ月間、板鉛を首につけたおかげで根治したと、自信ありげに語ってくれた。また彼の家族の何人かもその鉛板を用いてなおったと語ってくれた。

^{メタリック}金属療法が依然として初期の段階であることは事実である。疑う余地なく金属療法の可能性は大いにある。甲状腺腫に対する唯一の治療法として断食をし塩とだ液を利用する何人かの南米の農民たちと我々は知りあった。月が欠けていく（注。下線部は原文が大文字であることを示す。以下略。）ときに農民たちはこれら二つの要素を混ぜ合わせた。それから例の治療法を用い、そのようにしてその厄介な病気をなおしていたと農民たちは語る。生物学はこれら農民たちのいっさいの治療体系を深く研究する準備ができています。なぜなら我々のおばあちゃんの用いたそれらの処方の多くが名士たちの命を何度も救ったことを、我々は確信しているからである。

インドのヨギたちによれば喉頭チャクラの根は甲状腺から生じているという。そのチャクラには十六枚のハスの花びらがあると、ヒンドスタンの偉大な医師^{*}シヴァナンダ (Sivananda) は断言する。西洋の科学者たちは、自分たちの知らないことは笑う。我々は知らないことを研究の方がよいだろう。東洋の賢者たちは、超感覚的世界の波動を知覚する超聴覚を認める。彼らはその超聴覚を^{*}クレアローディアンス (clairaudience) と呼ぶ。

喉頭チャクラはクレアローディアンスのセンターである。甲状腺機能減退症は大人のマインド（精神）を無気力にする。このことは甲状腺とマインドとの深い関係を証明している。甲状腺とマインドがそれほど密接な相互関係にあるなら、甲状腺チャクラと概念の総合力に関する東洋の見解を受け入れてはどうか。喉頭チャクラの発達によって概念の総合力を得ると、インドの賢者たちは語る。物理学は^{*}エーテルを認める。ヒンドスタン人たちによればエーテルとは単にタットワ アーカーシャの凝縮したものにすぎないという。物質はエーテルの凝縮したものであり、同時にエーテルはタットワ アーカーシャの凝縮したものであり、そのタットワ アーカーシャには結局のところ物質の根源が見いだされる、そうアジアの偉大なヨギたちは語る。アーカーシャは原始の音であり、人間ではその道具は創造的な喉頭であるとヒンドスタン人たちは考える。

甲状腺チャクラの発達によってアーカーシャを支配できるとシヴァナンダ医師は断言する。そのときにはマハー・ブララヤ（注。宇宙の掃滅）の深い夜の間でさえも首尾よく生きられる。

甲状腺チャクラの覚醒によってクレアローディアンスを獲得すると、優秀な内分泌専門医にしてヒンドスタンのヨギであるシヴァナンダ医師は確言する。もしヨギが遠くにいるある友人の言うことを聴こうとして日々の瞑想にひたるなら、まどろみつつあるときにその言葉を聴けるだろう。内的瞑想によってクレアローディアンスが目覚める。

*

内分泌腺の分泌液は、いわゆる不随意筋の、自律神経系の秩序および抑制のすべてと密接に関係する。腺の分泌液は宇宙生理学の至高の叡智で肉体の驚異的な新陳代謝をことごとく支配する。内分泌腺の分泌液は大細胞群全体の成長・発達を抑制し、性徴を完全に制御する。

甲状腺には実に驚くべき金の放射が見られる。

* シヴァナンダ…スリ・スワミ・シヴァナンダ。自己実現した正真正銘のマスター。彼とマスター・サマエルそしてアルゼンチンのマスター・ルクセミル（現世での名前はプロバト）は三角形を形づくり、人類に献身した。

* クレアローディアンス…超聴覚、透聴、天耳通、靈聴。clair = clear「はっきりした」、audience「聴覚」。

* エーテル ether…ギリシア語のアイテール aithēr に由来する言葉。はじめアリストテレスによって地上の物質を構成する四大要素に対して、天体を構成する第五元素とされ、その後、微細精妙な物質の呼称となる。17世紀にはフックやホイヘンスは、「光の波動説」の中で、光を伝える媒体としてエーテルを仮想した。しかしアインシュタインの相対性理論の登場によりエーテルの実在を考えることは無意味とされ、1910年代には物理学から姿を消した。

* 自律神経系…交感神経系と副交感神経系の二系統がある。不随意筋の運動や腺の分泌を受け持つ。

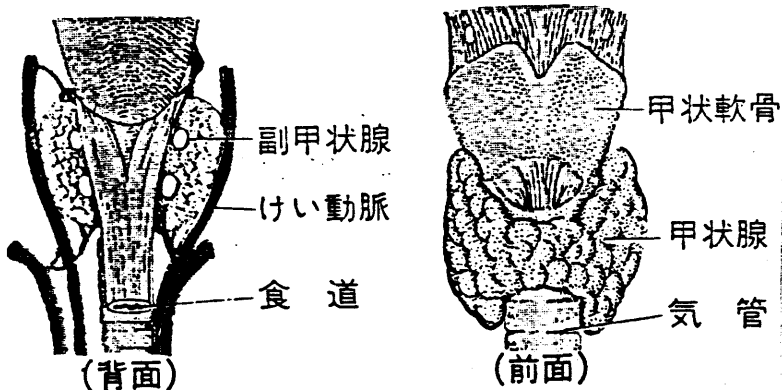
第四章 副甲状腺

副甲状腺を決して取ってはいけない、なぜなら、ひどいけいれんに突然襲われ、必然的に頓死することが十分に立証されているからである。

二対の副甲状腺は、細胞内と血液中に豊富にあるすべてのカルシウム値を驚くほど賢明なしかたで通常は調節する。

*

すばらしい四つの副甲状腺からの分泌液は、細胞と血液のカルシウムの抑制というこの仕事をすべて果たさねばならない。



この困難な仕事は、四つの副甲状腺の分泌液ゆえに可能となるにすぎない。

実際には、これらの副甲状腺は大変小さく、甲状腺のそれぞれの葉の上に位置する。

生物学者たちが注意深く観察すれば、おのおのの葉の上に豆粒大の一对の小さな器官を見ることが出来る。

占星術の主張では、火星がこの腺を調節するという。

公式科学は、まったくただの唯物的な見地からしか腺を見ない。

ノーシスの賢者たちの科学は、もっと先を行く。

あらゆる原子の中には物質・エネルギー・意識の三つ組が存在する。

各内分泌腺は真実の、マイクロコスモスの実験室である。内分泌腺の相互関係、生化学的な生成物の見事なやりとり、腺活動の限りない完ぺきさは、いやというほど、さる知性ある共同作用が存在することを示している。その共同作用の根源は、宇宙意識に求めねばならない。

生命のある所なら、どこにでも意識がある。湿りけが水に固有のものであるように、意識は生命に固有のものである。ソ連には現在、1500万人のイスラム教徒がいる。このことは、マルクスの唯物論が完全に失敗したことを明らかに証明している。

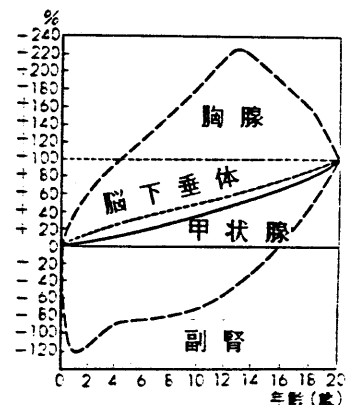
あらゆる機械は法に基づいて組織され、機械を操るための舵・ハンドル、それに機械を制御・操縦するパイロットがいる。もちろん人体も例外ではない。人体は、宇宙意識が自然の作業場で組み立てた完全な機械である。その機械には、それを操るための舵やハンドルがある。舵とは交感神経系である。その機械を制御するパイロットはインティモ（魂）である。こうしてアストラル体に包まれたインティモは、交感神経系というハンドルを操縦して、有機体全体といっさいのホルモン分泌を制御する。

* 副甲状腺ホルモンのパラトルモンは血液中のカルシウムとリンの量を調節する。骨組織と神経系に対するこれらのミネラルの重要性が知られている。(仏語版の注より)

第五章 胸腺

人間が性的に成熟を迎えると、胸腺は衰退に向かう。このことは既に立証されている。

胸腺は、まさに首の基底部に位置する。



内分泌系の発達曲線
出生後、20歳に至るまでの全増加量に対する百分率。即ち出生時を0として、20歳のときの大きさを100とした変化

胸腺は完全に不規則な構造をしている。

この腺は乳腺と密接な関係にある。どうして母乳が他のものでまったく代用できないのか、今その理由を理解できるだろう。

胸腺は子供の生命力を調節する。

この腺は月の影響を受けると占星術師たちは言う。ノーシスの賢者たちの望みは胸腺を保持し、衰退に向かわせないことである。

この腺が活発なら、有機体は老化しない。賢明に発音した母音「ア」(A)には胸腺を振動させる力があると、古代の医学の賢者たちは語っていた。古代の年老いた医師たちは、*アブラカダブラというあまりにも世間に広まったその賢明なマントラを用いていた。生涯を通じて胸腺を活動させつづけるためだといわれた。彼らはその言葉を次のように異教の神殿で49回発音していた。

ABRACADABRA	アブラカダブラ
ABRACADABR	アブラカダブル
ABRACADAB	アブラカダブ
ABRACADA	アブラカダ
ABRACAD	アブラカド
ABRACA	アブラカ
ABRAC	アブラク
ABRA	アブラ
ABR	アブル
AB	アブ
A	ア

母音「ア」の音は、伸ばして発音していたという。

音楽の音を利用して治療しだした医師たちもいる。医師の声とその言葉の一つ一つが、患者にとって生死を左右する原因であることを知るのには興味深い。

内分泌学は、音楽と内分泌腺との間に存在する深い関係を研究すべきである。我々の知らないことを笑うよりも、調査し分析し理解する方がよい。

赤ん坊のおなかがすくと、母乳を与えねばならない。赤ん坊をまる数時間もおなかのすいたままにしておくよう勧める、おかあさんのための初級読本は公衆衛生に反する罪である。

人間が自然を改めようとするなど、明らかにばかげている。赤ん坊が、おなかがすいて泣いているときに、食べ物を与えないのは自然に反する罪である。

*アブラカダブラ…病氣(特におこり)や災厄を払うまじないとして呪文や護符に用いられた。ヘブライの魔法書に出てくる。一説にはアブラクサス(ABRAXAS)に由来するという。

第六章 心臓

心臓は、まさしく二重のポンプである。心臓の片側は血液をある方向にポンプで送り出し、一方、他の側は別の方向に送り出す。それぞれ逆の方向であるが、驚くべき方法で補いあい、協調しあう。最も興味深いことは、心臓によって送り出される二つの逆方向の血流が対立せず、助けあって、互いに推進しあうことである。

心臓は、本当に有機体の太陽であり、創造の中で最も偉大な驚異である。けれども心臓の生理学を知らない、高等教育を受けた教養人たちがいる。

大動脈の豊かな血流を観察することは、すばらしいものである。その動脈は、本当に流れが豊かで美しい。命の躍動にみちたその偉大な流れは、より小さな流れ、小さな動脈に分岐し、それから無数の微小な生命（細胞・生殖質など）を養い命を与えるために、命をあらゆる部分に運ぶ小さな流れに枝分かれしていく。その有りさまを観察するとき、我々は感嘆と神秘的な至福にみたされる。それらすべての生命は、物質・エネルギー・意識の三つ組からなる。無限小のそれらすべての生命は、我々をその神として崇める。最小の血流は毛細血管である。これらの毛細血管の網状組織内には、様々な組織・器官の細胞が見られる。

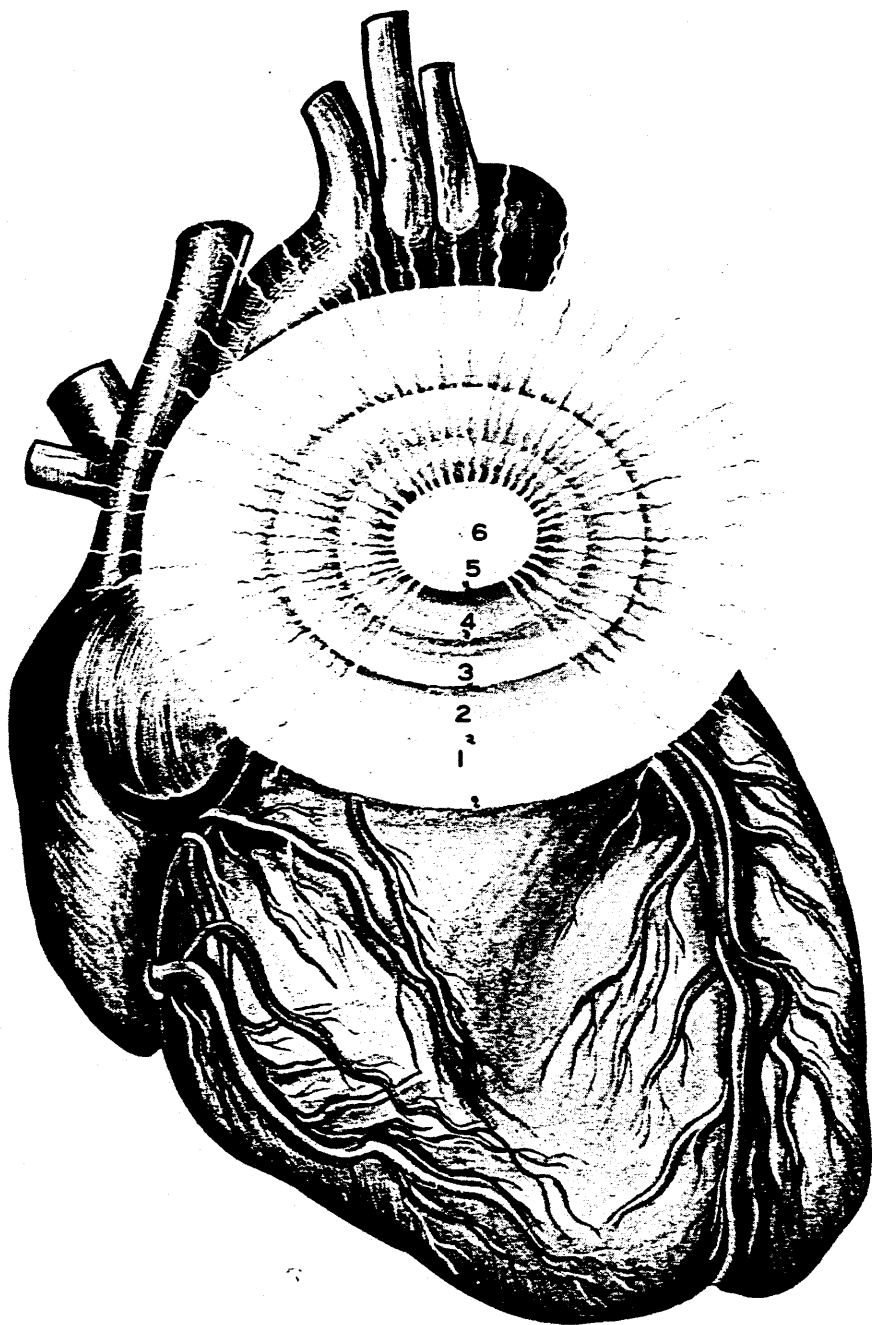
だから細胞は、心臓によって送り出される血流で生きる。細胞は分子からなり、分子は原子からなる。あらゆる原子は、ミニチュアサイズの真実の宇宙である。あらゆる原子は物質・エネルギー・意識の三つ組からなる。もろもろの原子の知性は、心臓の左心室にあるヌースという原子に支配される。

心臓の吸いこむ諸原子はヌース原子の命令に従い、各器官の活動を導くエンジニアの諸原子にその命令を伝える。各器官の原子の労働者たちはエンジニアの諸原子の命令に従い、命令通り働く。

病気の原因となる怠け者の原子も、数多く存在する。心臓のヌース原子は、建築家の原子の指導のもとで働き、この最後のものはインティモの命令のもとで働く。

心臓は握りこぶし大の、がらんどうの筋肉である。どちらかと言えば西洋なしに見える。心臓は収縮・拡張し、絶えまなく収縮・弛緩する。これは命という偉大な大洋の潮の干満である。あらゆる命にはその収縮・拡張がある。万物は脈打ち、そのはね返りを招く。無限小と同じように無限大でも、万物にはリズム（活動）・脈が存在する。「下にあるがごとく上もある」、「上にあるがごとく下もある」。それが偉大なる命の法である。

心臓には驚くべき二つの極がある。ポジティブな極とネガティブな極である。それらは、逆方向にそれぞれ血液を絶えず送り出している二つの心臓のようである。心臓の二つの区画には、おのおの上下、二つの部屋がある。上の部屋は心房であり、下の部屋は心室である。秘密の教義は、脳内に秘密の七部屋を認める。



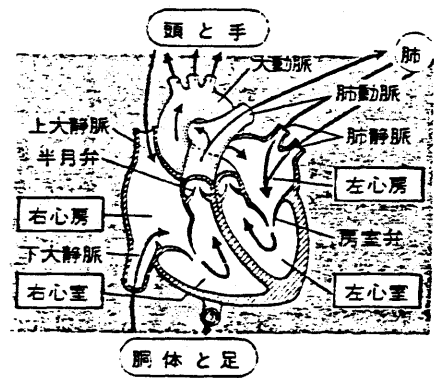
心臓内にある六つの光球

①他の五つの光球全体に浸透する形で存在している白色光球は、絶対者ブラフマンの光球 ②黄色光球は微細根本自性球 ③バラ色光球は微細生氣球 ④青味がかった緑色の光球は我執球 ⑤白色をして光を放射しているのは心素球 ⑥白色の心素球内であって、まばゆいばかりに光り輝く微細な光球がアートマン(ヌース)

(スワミ・ヨーゲシヴァラナダ著『魂の科学』たま出版より)

右心室と右心房があり、左心室と左心房がある。上部の部屋には左右に心房があり、下部の部屋には左右に心室がある。

心臓のハスを瞑想することによりタットワのヴァーユを支配し、^{*}風とハリケーンを操作する力を得る。ヒンドスタン人によると、心臓のハスの花には十二枚のすばらしい花びらがあるという。心臓の働きの奥深い全秘密、心臓のすべての根本的命は、十二枚の花びらを持つハスの花に求められるべきである。そのハスの花の微細な茎は心臓寺院から伸びている。



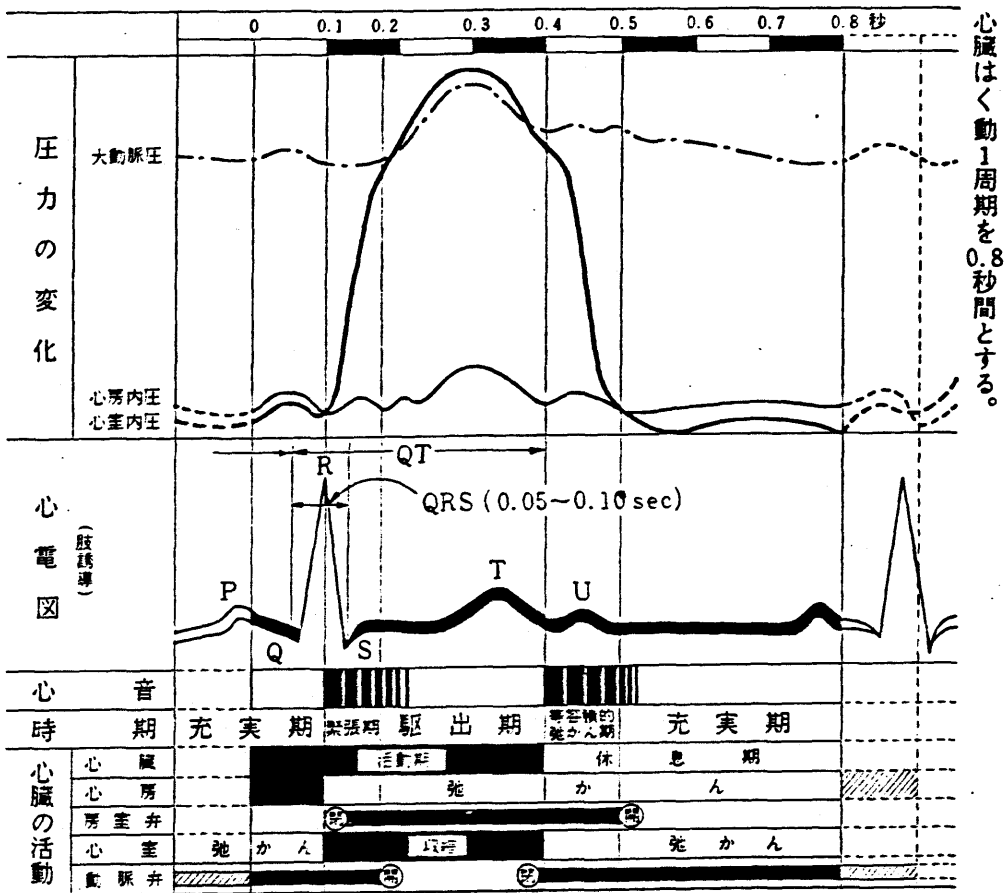
大静脈は老廃物でみちた血液を心臓に送る。右心房はその濁った血流をすべて受けとり、その下にある右心室にたくみに送る。すると右心室は、ただちにリンパと老廃物でいっぱい血液を心臓弁を通して送り出し、肺動脈によって肺の内部を通過させる。

宇宙の知性は、何もおろそかにしない。そのすべての動きを観察するのは、賢者にとって興味深いことである。大きな肺動脈がより小さな二つの肺動脈（それぞれ両肺に通じる）に分かれるのを見るのは、すばらしいものである。

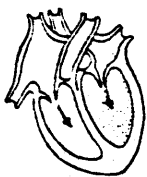
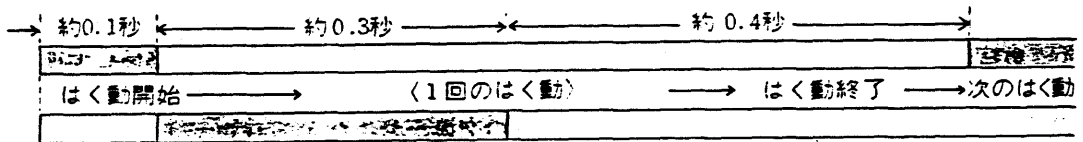
肺の内部で肺動脈も枝分かれし、最後には微小の毛細血管になる。血液は一滴ずつ、肺の毛細血管を必然的に通らねばならない。血液はそこで余剰の炭素無水物を引き渡し、代わりに余剰の酸素を吸収する。

酸素を多く含む血液は小さな血管にうまく入りこみ、それから最も大きな血管に入りこむ。肺の二本の大きな血管は、酸素をたっぷり含む血液を心臓の左心房に送る。血液は、すでに自分の余剰の炭素無水物を酸素と交換してしまった。今や命がよみがえった。血液は左心房から左心室に送られてから、心臓のリズミカルな推進力を受けて大動脈を通り、最後にはすべての動脈と血管に流れこむ。空気の原理ヴァーユと心臓との間に存在する密接な関係をこの全作業で見ることができる。したがってヒンドスタンのヨギたちがヴァーユを心臓と関連づけるとき、彼らはまちがってはいない。心臓の器官に関して東洋人の持つ宇宙生理学的な深い知識を、このことは示している。西洋人はどうして東洋のヨギを学ぼうとしないのか。なぜ西洋人は知らないことを笑いたがるのか。偉大なヨギ、シヴァナンダを研究する方がよいだろう。その方が賢明だろう。（ヒンドスタンの賢者シヴァナンダの著した『クンダリニー・ヨギ』は、東洋の叡智の驚異である。）

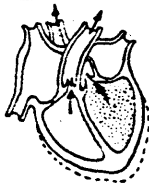
肉体をヒーナスの状態に置くことを覚えたい者（すなわち肉体を四次元に置くことを覚えたい者）は、心臓のハスを発達させるとよい。肉体をヒーナスの状態に置くヨギは、空を飛び、^{*}ガリラヤ湖でイエス・クリストが行ったように水面を歩き、あるいは実際にインドの多くのヨギがするように燃えることなく火渡りをする事ができる。そして仏陀の弟子たちがしていたように、岩を端から端まで貫通することができる。



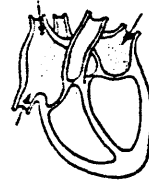
心臓の拍動に伴う諸現象



心房が収縮して、血液が心室に送られる。



心室が収縮して、血液が動脈に送り出される。



心臓の弛緩期、血液が静脈から心房にはいる。

収縮期

弛緩期

拍動の起こる順序と、それに伴う血液の流れ方

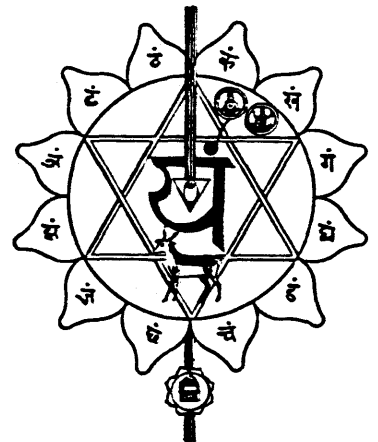
心臓のハスは瞑想と祈りで発達する。心臓は二つの音を生じると西洋の医師たちは語る。一つは鈍い低音、もう一つはよく響く高音。すなわち「ルブ (LUB)」と「ドゥブ (DUB)」である。最初の心音は心室が収縮した後ただちに生じ、次の心音は大動脈と肺動脈から心室を分離する弁の閉鎖によるものである、そう生理学者たちは断言する。ヒンドスタンの医師たちはさらに鋭敏な感覚を持つために、もっと先に行く。心臓には十の神秘的な音が存在するとインドのヨギたちは語る。

最初の音は「人の子」の声のようである。第二の音はチンビニ (CHINBINI)である。第三は宇宙の大なる鐘の音である。第四は大地の内なるごう音である。第五はリュートの甘い音、第六は神々のシンバルの音である。第七はうっとりとしたフルートのそれである。第八は太太鼓のそれである。第九はダブルドラムのそれ、第十の音は、そこで黙示録が永遠の声をくりかえす七つの雷鳴である。西洋の医師たちの聴く二つの音は、本当に確かなのか。どうして東洋人のいう十の音が確かでないことがありえようか。

西洋の医師たちのいう二つの音は、もちろん立証されている。では、どうして東洋人のいう十の音が立証できないことがありえようか。問題は立証のしかただけである。西洋人には科学的な証明法がある。東洋人にも科学的な証明法がある。東洋では十の神秘音にマインドを固定して瞑想する。東洋人のマインドは十の神秘音にひたり、それから心臓の十の神秘音にこうこつとしつつ、そのニス・フォルマティウスに、すなわち肉体内の、中世の医師たちのいうそのアストラル体に一体化し、のみこまれる。それがヒンドスタンのヨギたちのサマーディである。そのようにしてヨギは無限のはるかなる諸世界に移動する。

西洋の医師は、まだ研究も体験もしていないことを笑い批判する代わりに、ヨギを研究すべきなのだが。

心臓チャクラ内には言葉では言えないしっ黒のヘキサグラムの空間があると、ヒンドスタン人は言う。そこでは十の神秘音が響く。西洋人は、このことをすべてあざ笑う。もし西洋の医師たちが超視覚 (クリアボイヤンス) を開発すれば、もう笑わないだろう。心臓の拍動を正確に表現できるようになる、ということがわかるからである。心臓の拍動は心電計という装置で克明に表される。どのようにして、心臓の四部屋がまるで二部屋だけのように、その拍動の時間を完全に合わせるのか、そのしくみを見るのは驚くべきことである。これができるのは、まさしくヒス束のおかけである。この、細胞の神経束は房室束とも呼ばれ、弱い収縮の拍動時にのみ二つの心房を、そして強い収縮の拍動時にのみ二つの心室を、驚嘆すべき方法で自動的に同調させる。



心電計が心臓の拍動を正確に表せるなら、超視覚を開発する者にどれだけ多くのものが見えるだろうか。新しい世界が超視覚者の前に展開する。無限の世界、数えきれないほど多種多様な世界が。

心臓内には、世に到来する、あらゆる人間の内なるクリストが存在する。我々の真実の本質的存在が。

* 風とハリケーン…各チャクラに対応する象徴的な形と五元素は以下の通り。(下のチャクラから順に) 四角と地(土)、三日月と水、三角と火、ヘキサグラムと風(空気)、円と空(エーテル)、リングと識(マインド)、点と究極実在。

* ガリラヤ湖で…『マタイ福音書』14:22-33、『マルコ福音書』6:45-52、『ヨハネ福音書』6:16-21。



内分泌学と犯罪学の基礎知識

サマエル・アウン・ベオール著

第七章 すい臓

すい臓は、部分的に管のない腺であるということがわかっている。人体のすべての消化液は、有名なウイルスング管を通して十二指腸に流れこむ。

ベルリン大学医学教授でドイツの医学の大学者アーノルド・クルム・ヘラー（注・下線部はスペイン語原文が大文字であることを示す）博士は、乙女座は腹部に、とりわけランゲルハンス島に影響すると『ゾディアカル・コース』の中で言っている。

インシュリンは炭水化物の全新陳代謝を抑制するのでとても重要である。インシュリンは、それらすい臓のランゲルハンス島から分泌される。

ランゲルハンス島が正常に機能しないと、糖尿病になる。すい臓の主な仕事は糖の変換である。ランゲルハンス島が正常にインシュリンを分泌せずに、糖が直接血液に行くととき、それが糖尿病なのである。

インシュリンの治療法によって医学は糖尿病を抑制するに至った。だが、その治療法では糖尿病の治療はできない。よく知られた抗糖尿病茶によって糖尿病をまんまと治療した多数の糖尿病患者と我々は知りあった。その茶の煎じ方は以下の通り。

アボガドの葉 30グラム

ユーカリノキの葉 30グラム

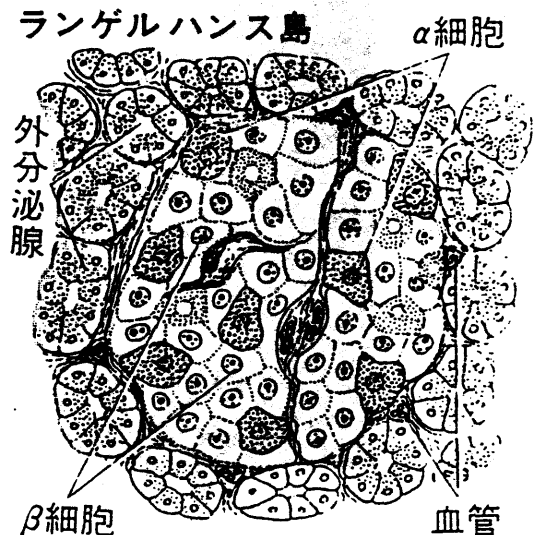
クルミの葉 30グラム

1リットルの水の中で全部を煮る。

一日に三カップ服用。各食前に一カップ。

六ヵ月間つづけて飲む。^{*}

インシュリンによる治療は、この無害な茶に対立するものではない。ランゲルハンス島から



ランゲルハンス島のβ細胞からインシュリンが分泌され、血糖量を低下させる。

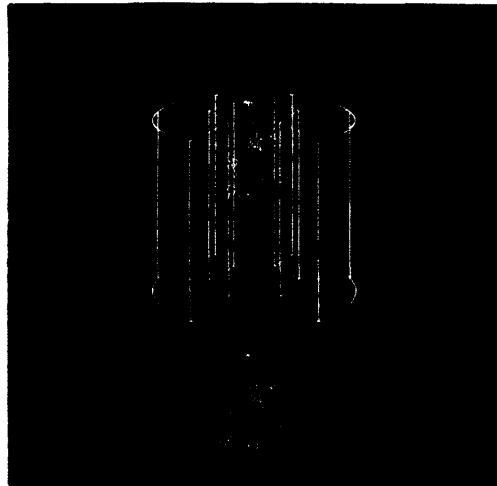
の分泌液は直接血液に入る。ヒンドスタン人は、へその上には十枚の花びらを持つハスがあると言う。へその領域に位置するこのチャクラは、肝臓・胃・すい臓等を支配する。ヨギたちによれば、このチャクラの色は生ける火、閃光、そして稲妻にあふれた雲の色のものであるという。

このへそチャクラを開発したヒンドスタンのヨギたちは、燃えることなく火中にとどまれる。ヒンドスタンの賢者たちは、このへそチャクラにはタットワのテジャス（火のエーテル）がきらきらと輝いていると言う。

西洋の生物学者は、そんなことはありえないと言う。西洋の学識者たちは、これを調査しにヒンドスタン旅行するとよいのだが。インドを旅した多くの懐疑的な西洋人たちは、それらのヨギたちが燃えることなく火中にとどまるのを見て驚いて帰ってきた。

ヒンドスタンのヨギたちは、瞑想と集中によってこのへそチャクラを発達させる。ヨギたちはまる何時間もへそに集中する。西洋の催眠術師たちがヒンドスタン・パキスタン・大タタール・モンゴル・中国・チベット、それらすべての地を旅行してまわり、それら東洋の苦行者たちが皆へそに精神集中するのを見るとき、彼らは自己催眠のためにそうしていると推測する。そうではなく、実際はそれらの神秘家全員はへそチャクラを開発するために、そのチャクラにまる数時間というもの集中・瞑想する。

*その治療効果を増大するために、エレメンタル（精霊）すなわち、つながりのある植物の意識または魂と働くことが重要である。そのテーマに関してはマスター・サマエルの『神秘医学および実践魔術手引書』、『火のバラ』のエレメンタル魔術の項目を参照のこと。（フランス語版注釈より）



内分泌学と犯罪学の基礎知識

サマエル・アウン・ベオール著

第八章 肝臓

肝臓は有機体内で最大の腺であり、横隔膜のすぐ下の右側に位置する。暗赤色をしていて、重さ約4ポンド(1.8kg)、長さ、およそ9インチ(23センチ)、幅7インチ(18センチ)、その最も厚い所で4インチ(10センチ)ある。

医師たちは肝臓のことを通称「五つの器官」と呼ぶ。カバリストたちは、5がゲブラー(法の厳格)(注。下線部は原文が大文字であることを示す)の数であることを知っている。肝臓にははりつけになったクリストがいる、そう語る神秘家たちもいる。疑いもなく肝臓は欲望の座である。この見地から、肝臓にははりつけになったクリストがいると確かに言うことができる。

肝臓には五つの見事な葉、五つのグループの調和のとれた賢明な管、五本の驚くべき血管、五つの基礎的な機能がある。

欲望の娘であり一切の悪の娘である、それらすべての行いの上に重くのしかかる法、ネメシスが、肝臓の5というこの数字から思い出される。

ピアチェンツァ(注。イタリア北部ポー河畔の都市)の遺跡で発見された青銅の肝臓には、黄道十二宮の彫刻が見られた。これらの彫刻は、我々に肝臓の5について考えさせる。^{*}古代の占星術師達は、肝臓を調べながら予言していたといわれる。彼らは肝臓を見て予知していたのである。

小宇宙である人間の黄道帯は、皆それ自体の法則を持ち、肝臓に記されたそのサイン(星座)を持つ。

肝葉は、肝臓の構造全体に統一性を持たせるにいたる。そして肝機能に統一性を持たせる。生物学者が肝臓のその腺を研究するとき、^肝驚くべき葉がミニチュアサイズの肝臓のようなものであることを確認できる。すばらしいことではないか。肝葉全体を知りつくしている者は、肝臓全体を実際に知りつくしている。肝葉は、驚嘆すべき結合組織によって見事に結合した細胞の集団である。それぞれの葉には^肝

肝臓内部のつくり(一部)

肝臓は、肝細胞が放射状に集まってできた肝小葉からなり、その間に、血管・門脈・胆管が枝わかれして走っている。



美しい完全な五、六個のひだがあり、それ自体の微小の美しい脈管のセット、分泌するそれ自体の細胞、そしてそれ自体の管がある。肝小葉の一団は、一つの葉全体を形成し、五つの葉が肝臓そのものを構成するにいたる。これが5の法則である。^肝

肝細胞は脂肪の消化に必要不可欠な胆汁を分泌する。肝臓は、組織にごく重要なブドウ糖を生産する。糖類をブドウ糖に転化するこの作業は、錬金術のすばらしいワークである。

ブドウ糖からグリコーゲンへの、またグリコーゲンからブドウ糖への錬金術的転化を監視する、肝臓のある内分泌が存在する。

肝臓は有機体のカロリーを支配している。肝臓は、その錬金術の実験室でアンチトロンビンという物質を生産する。アンチトロンビンは、血べいの形成に不可欠な物質である。

肝臓のこれらすべての五つの働きは、有機体の生命にとって基本的なものである。肝臓の役目は錬金術の実験室ですべての古い衰弱した細胞を cremar し（？ 英語版では「焼却し」、フランス語版では「選別して破壊し」）、容易に除去される老廃物を形成することである。

肝動脈は、必要とするいっさいの血液を肝臓に供給する。肝臓を包む結合組織は、その臓器自体に浸透するにいたり、その完全な五つの部分に肝臓を分割する。おのおのの肝小葉は、多数の血管で囲まれた一つの島のようなものである。

肝臓の機能

養分の貯蔵	1. 炭水化物—グリコーゲンとして 2. 脂 質—中性脂肪・リン脂質として 3. タンパク質—肝細胞構成のタンパク質として 4. ビタミン類—A・B・D
養分の転化	5. ブドウ糖・果糖・ガラクトース→グリコーゲン→ブドウ糖 6. 乳酸・ビルビン酸・アミノ酸・脂肪酸→グリコーゲン 7. ブドウ糖・タンパク質・グリセリン→脂肪 8. カロチンの加水分解によるビタミンA合成
その他物質の生成・分解	9. 尿素の合成（オルニチン回路）排出作用 10. 血しょうタンパクの生成 11. タンパク質アミノ酸分解（脱アミノ作用） 12. プロトロンビン・ヘパリンの生成
消化腺として	13. 胆汁の合成分泌 11/日
解毒作用	14. 有害物質の無毒化（解毒ホルモンにより促進） 15. 細菌その他異物処理
内分泌腺として	16. 造血作用促進のための抗貧血性ホルモン分泌 17. 解毒ホルモン分泌
その他	18. 血液の貯留による循環量調節 19. 大量エネルギーの発生による化学的体温調節の一助

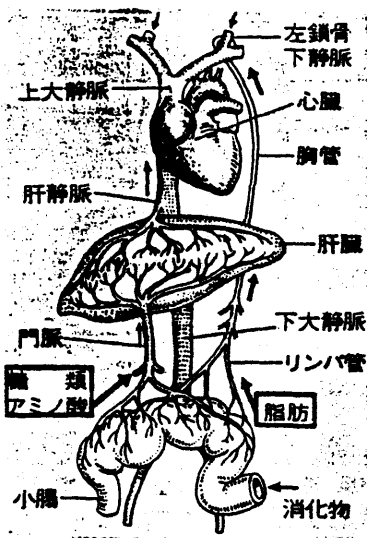
門脈は肝臓に静脈血を運ぶ。この静脈は、肝臓内で多数の血管に枝分かれする。各肝小葉は、それ自身の静脈を持つ。肝小葉の各肝細胞は微小の血管の網だけである。

内なる小葉の内部には細静脈も存在する。肝小葉の各肝細胞は、有名な門脈を通して胃・脾臓・すい臓・腸から来た静脈血を受け取る。門脈は至純の生命の川のように養分を肝臓に運ぶ。肝細胞の小さな孤島は、内なる小葉の細静脈からその血液中の養分を受け取る。肝臓内の生命なしでは何も残らない。すべては生命を受け取る。各肝細胞は養分と生命を受け取る。各肝細胞は養分を有機体の全細胞にとってとても貴重な物質にうまく転化する役目を持つ、錬金術の真の実験室である。変換されたすべての血液は内なる小葉の細静脈を通して、中央静脈と呼ばれる血管内部に行く。

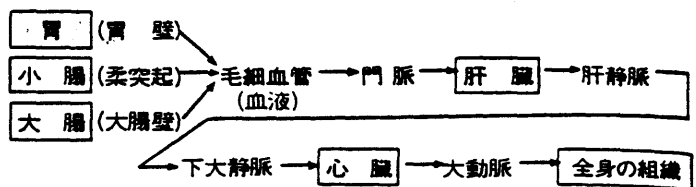
中央静脈は大静脈として知られる、流れの豊かなその大河にすべて注ぎこむ。意識と知性ある小さな労働者として肝臓内に生きる肝細胞は、多くの物質を胆汁に変換し、消化を助けねばならない。胆汁は必要となるときまで胆のうに貯蔵され、必要になれば小腸の十二指腸に分泌される。

ヒンドスタンのそれらの賢者達は、肝臓の腺からすばらしい一輪の蓮華、肝臓チャクラが出ているのを透視する。

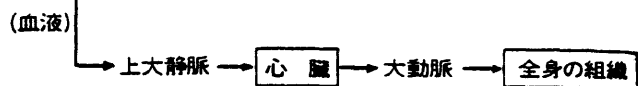
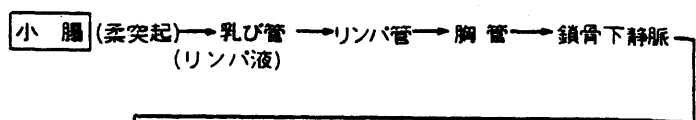
*古代の占星術師達は…バビロニアの肝臓占い（ヘパトスコピー hepatoscopy）では、殺したばかりの動物の肝臓を知らべて、その形・色・大きさ・斑紋から前兆を読みとった。



養分の移動経路



毛細血管からの養分の移動経路(体循環)



リンパ管からの養分の移動経路(リンパ循環)

第九章 副腎

アドレナリン（注．副腎髄質ホルモン）は人体内できわめて重要な役割を果たし、血管壁の緊張を保つ。副腎皮質は性腺の発達と密接に関係する。副腎皮質が性に及ぼす顕著な影響は疑いえない。副腎皮質はいくつかの腺の発達とすべての性徴に影響を与える。名高い医師パラケルススは腎臓に関してこう言った。

*

「金星の本性と高揚は腎臓にあり、惑星や内臓に対応する段階と運命にある。さて、金星の作用が、結ばれるべき大地の実に向けられるのと同様に、腎臓の力も人間の实（彼は疑いなく性器について述べている）に集中する。金星は人間の实によって決して体を消耗するにはいたらないだろう」。

「当然のことであるが、腎臓はこの機能を果たし、実際にいかなる他の器官もそれをよりよく行えないのではないか。そうして金星が例えば偉大な実体から妊娠の能力を受けるとき、腎臓は人間の感情（センスス SENSUS）の力と意志の力をまひさせる」。

精神分析学者たちは、パラケルススの述べることを証明できる。フロイトの精神分析学は、医学の分野に真実の革新をもたらすに至った。精神分析学を受け入れようとしなかった医者たちは、時代遅れで古臭く思える。

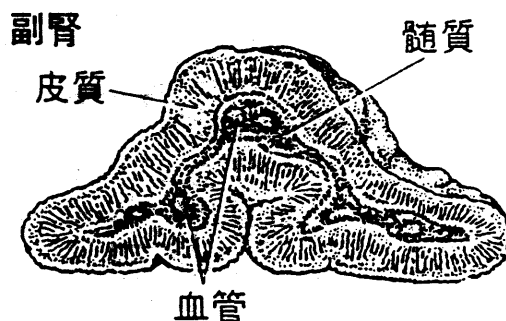
ヨギ達は腎臓に二つのチャクラを透視する。それらは各腎臓に一つずつある。ヒンドスタンの賢者達の言うところによれば、これら二つのチャクラには人間の純潔もしくは姦淫の印がつけられているという。このことから、聖ヨハネの黙示録のあの言葉が思い出される。^{*}「わたしは人の思いと心を探る者であり、あなたがたの行ないに応じてひとりひとりに報いよう」。

偉大な透視者達には、各腎臓に一つずつある二輪の蓮華が見える。人間が姦淫するとき、それらの蓮華は血のような赤色をしていて、純潔なときは白色をしているという。副腎は腎臓の上部に位置する。これらの腺は、本物の黄色くて幅のある小ピラミッドのように見える。各副腎には実際に皮質と髄質があり、それらは構造と働きの点において互いに異なる。

副腎皮質ホルモン（注．コルティコイド）は血液中と細胞内のカルシウム・カリウムの量を制御する。

恐怖・悲しみ・怒り等を感じるときには副腎髄質は大量のアドレナリンを分泌し、人体の全細胞を準備して、ありとあらゆる緊急事態に対処する。精神分析学はそのことを立証した。

犬は、きゅう覚の非常に鋭い動物である。人が犬を恐



副腎は内分泌腺の一種で、内部の髄質とそれを取りまく皮質からなる。

がると、犬はその人の副腎から分泌されるアドレナリンのにおいを知覚し、かみつこうとする。犬はきゅう覚によって、誰が自分を恐がっているかを知るのである。

過剰のアドレナリンは有害で、消化を妨害する。強い情動は消化不良を引きおこしかねない。

* 金星の本性と高揚…占星術では腎臓・副腎は、天秤座（金星）が支配する。

* わたしは人の思い…黙示録 2：23。日本聖書刊行会の新改訳聖書より。「思い」の注として、直訳「腎臓」（内なる人を表す）とある。

第十章 月卑臓

脾臓は人体内にある非常に重要な器官である。就寝時間になると、霊はアストラル体に包まれて肉体を離脱し、四次元の世界をさまよう。その間、肉体内に何かが残る。その何かとはエーテル・ダブル（複体）である。そのダブル（複体）はヒンドスタンの賢者達のいうリング・シャリーラである。医師パラケルススは、そのエーテル・ダブルをムミアと呼んだ。

今はエーテル物質からなる有機体のダブルのことを問題にしている。それはムミアである。ムミアは西洋医学ではまったく知られていないが、東洋医学者達には完全に知られている生命の座、生命の根本である。

パラケルススのムミアは熱電磁氣的な凝固物である。今言った生命体は、その基本的なチャクラを脾臓に持っている。脾臓の蓮華は太陽の生命流をもつばら扱い、引きつけ、そして吸収する。そのとき脾臓では、白血球が赤血球に変わるのが見られる。

脾臓チャクラに集められた生命エネルギーは太陽神経叢を通り、それから交感神経系のすべての神経経路から広がり、有機体全体を命で充電する。

甲状腺は交感神経系のすべての経路を消毒しながら、その生物学的ヨードによってこの作業に協力する。

アストラル体に包まれた霊が肉体に入るときには、肉体はすでに回復している。もし意識ある人間が肉体を離脱しないなら、その人物の感情と思考が有機体のこの回復作業を妨げるだろう。

交感神経系の経路に多くの老廃物が蓄積しているのが日中見られる。それらの老廃物は生命流の循環を妨げ、そうこうするうちに睡眠が訪れる。睡眠過程と共に有機体は回復する。

トランス状態の霊媒は、脾臓からムミアを投射できる。そのとき、肉体を去ったある実体たちはそのムミアを利用し、その中に入る。それから彼らは凝縮して物質化する。あの世に住むある人々は、そのようにして目に見え、手に触れられたのである。これは空想ではない。なぜなら、あの世の人々の写真が撮られたからである。感光板はうそをつけない。事実は事実である。

ボゴタ（注．コロンビアの首都）国立大学医学教授の名医リス・セア・ウリベ博士は、百パーセント無神論者で唯物論者で懐疑論者であった。その学者がナボリの実験室で物質化したそれらの亡霊達を見、触れ、感じたとき、うって変わって百パーセント心霊主義者（スピリチュアリスト）になった。

そこナボリで有名な霊媒エウサビア・パラディーノを伴ってなされた物質化現象が、科学的な実験室で調査・研究された。そのとき疑い深い科学者たちは見、聞き、写真撮影し、実験し、そして信じた。

第十一章 生命の本質

エーテルの存在を疑う科学者たちには、その理論の科学的根拠はない。実際、彼らは言葉で、用語で遊んでいる。エーテルは放射能、あるいは磁場であるとかいうことは、エーテルの存在を否定するものでも肯定するものでもない。いずれにしても、彼らの疑問、分析、用語の交換は、エーテルと呼ばれるそれを研究するのに役立つにすぎないだろう。たいてい人間は用語の、言葉の問題等のためだけに口論するのが普通である。しかし結局、事実は事実なのである。

ロシアの学者たちは強力な望遠鏡で原形質の状態にある諸世界を発見した。それらの原形質の諸世界は、すでにエーテルから抜け出したのである。我々はエーテルの諸世界を簡単な帰納法で受け入れることができる。たぶん科学者の中にはこの用語の嫌いな者もいるだろう。用語は、さして重要ではない。重要なのは真実である。

原形質以前の全世界は、エーテル状態で存在する。ヒンドスタンの大科学者ラマ・ブラーサは言う。「すべてはエーテルから来て、エーテルにもどる」。

もしエーテルから原形質が生じるなら、エーテルは存在する万物の生命の本質であることを認めねばならない。

東洋の神秘家たちは、人間のエーテル体は四種類のエーテルからなると考える。これは西洋の科学者たちの好むところではない。けれども西洋の科学者たちがエーテル（それにつけられる名前は重要ではない）を研究するなら、簡単な分析と自らの実験によって東洋の四つのエーテルを認めないわけにはいなくなるのだが。

そういうわけで人間のエーテル体には四つのエーテルがある。化学エーテル・生命エーテル・発光エーテル・反射エーテル。これら四つのエーテルは、それぞれいっさいの有機的組織と密接な関係にある機能を持つ。

化学エーテルは、有機体のすべての同化（注．外から養分として物質を取り入れて、自分の体を構成する成分と同じものに変えること）・排出過程と関係する。生命エーテルは種族の生殖過程と関係する。発光エーテルはいっさいの知覚過程と関係する。反射エーテルは、記憶・想像・意志等の機能と密接に関係する。

生命体は血管運動神経系のすべてを支配する。生命体は生命の座である。各エーテル原子はそれぞれ各物質原子の中に浸透し、それを振動させる。もし生命体がある人から完全に取りだすなら、その人は必然的に死に至る。化学的、物質的な有機体が、たとえ一瞬であっても生命体なしに生きられる、そう推定するのは愚の骨頂である。無神論者で唯物論者である同じロシア人たちは、物質を深く研究した後、生命物質の生命の本質に関して概念を形成するときにとっても慎重になり始めている。人体を調査する科学者は、エーテル体に接近しつつある。彼はそこに必然的に到達し、まもなくあるエクトプラズム（注．霊媒の体から発し様々な形を取るという心霊体）でエーテル体を凝縮でき、実験室でそれを研究するだろう。

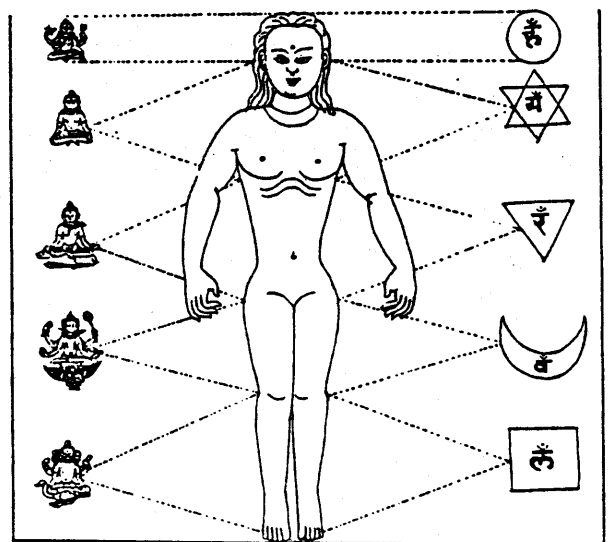
我々の有機体のすべての機能、カロリー・生殖・燃焼（酸化）・代謝等のすべての働きは、その土台を生命の本質に持つ。

生命体が衰弱すると、肉体は病気になる。

第十二章 タットワとホルモン

エーテルは火の状態で存在する（テジヤス）。空気の原理として気体や流体の状態で存在する（ヴァーユ）。水の原理として水の状態で存在する（アパス）。鉱物の原理として石の状態で存在する（プリトヴィー）。

これらがヒンドスタン人のタットワである。これらのタットワが結晶または凝固するとき、火・空気・水・土という物質の要素ができる。



我々のエーテル体はタットワからできている。タットワとチャクラは深い関係にある。タットワはチャクラに入り、それから内分泌腺の中に行く。腺の中でタットワはそれら内分泌腺の極微の実験室の作業を促進し、ホルモンに変わる。

タットワは有機体に入るが、そこから二度と出ることはない。

タットワは遺伝子と染色体にもなり、それらはずっと後に精子になる。

すべてはエーテルから来て、エーテルにもどる。

エーテルは、アーカーシャという物質の凝縮したものである。この物質は、根本のムーラプラクリティ（注。根本自性、根本原質、質料因）の最初の放射である。ムーラプラクリティは、錬金術師たちの間ではエンス・セミニス（精液の本質）として知られた、つまらない取るにたらない原物質である。

アーカーシャは原物質の火の放射であり、精液の中に含まれている。水は火の宿であると錬金術師たちは言う。アーカーシャは、ヒンドスタン人の言うクンダリニーである。

原物質はすべての宗教の創世記に出てくる水で表される。あらゆる星雲の原形質（プロトプラスム）は、最初エーテル的であった。さらに深くつきつめれば、あらゆる結果の背後には原因があることを認めねばならない。エーテル自体にも原因がなければならぬ。エーテルの背後にはアーカーシャがあることを、我々はヒンドスタンのヨギたちから学んだ。その東洋の賢たちによれば、アーカーシャは火の海であるという。その超アストラルの火は、エンス・セミニス（インドの賢者たちのムーラプラクリティ）の中に含まれている。エンス・セミニスは、よく知られたあらゆる物質の種となる原子である。アーカーシャは原始の音、超アストラルの火である。その音はアーカーシャの瞑想によって凝固する。クンダリニーの蛇は火であり、音でもある。聖なる蛇を上昇させないで、いかなる者も言葉を具現（受肉）できないだろう。アーカーシャなくして、音を形にし結晶することはできない。

ヴァーユ・プラーナはアーカーシャの音波である。それらの音波はエーテルのタットワに凝固する。タットワは、火・空気・水・土という自然界の四大要素に結晶する。要するに物理化学的な世界は音の物質化の結果ということになる。物理化学的な世界は凝固した音である。我々は人間の姿をした教義上の神を認めないが、宇宙の原因の中の原因としての音は科学的に認める。

宇宙発生以前の音にもその原因があるはずである。東洋の偉大な賢者たちは太陽ロゴスについて語る。クルム・ヘラー博士は、ロゴスは夢見ると言っていた。確かにロゴスは完全なる複数の統一（ユニティ）である。ロゴスは言葉の軍隊である。ロゴスはことばである。「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」。（注。『ヨハネ福音書』1：1-5）

ロゴスは一個人ではない。ロゴスは言語に絶する存在たちの軍隊である。



アンドロメダ大星雲。地球から200万光年の距離にある。

第十三章 前立腺

この非常に重要な腺はごく小さい。男性とホ乳類のすべての雄には前立腺がある。

注意して調べてみると、そのすばらしい腺はちょうど膀胱のくびれた部分にあるのがわかる。

公式科学はまだ前立腺のすべての機能を完全には解明していない。

前立腺は白っぽい粘液を分泌する。

医師たちは、女性の尿道の長さは約35ミリしかなく、とても膨張性があることを知っている。

男性ではその長さが20から27センチあることが確認された。

ギリシア・エジプト・サモトラケ・トロイア・インド等の呪術医たちは前立腺をいつも大変重要視した。偉大な医師でインドのヨギ、スワミ・シバナダによれば、前立腺の蓮には六枚の花びらがあるという。

自然の超感覚的世界、四次元には多くの住人がアストラル体で住んでいる。その前立前チャクラはそれらすべての住人を意識する力を与えてくれると、アジアの賢者たちは言う。ヒンドスタンの偉大な賢者たちは毎日、前立腺チャクラに集中する。このチャクラが磁気車輪のように左から右に回転するのを想像しなさい。口を閉じて「ム」(M)を発音しなさい。雄牛の鳴き声をまねて、ただし声に抑揚(注. decoso ? 英語版では「低音」deepness、フランス語版では「変化・抑揚」modulations)をつけずに発音する…。波状の長く伸ばした音である。これを毎日、何年も実践するなら前立腺チャクラが目覚める。

前立腺チャクラが活動を開始するなら、肉体からアストラル体で離脱する能力を得る。そのとき物質とは関係なしにそのアストラル体で行動できる。人間はアストラル体で他の惑星に移動できる。また生と死の大神秘を自分で調査できる。前立腺チャクラはパーソナリティーを開放する能力を授ける。ペヨーテは、人間のパーソナリティーを開放するメキシコのサボテンである。ペヨーテによって誰でも意識的に幽体離脱できるのである。

このサボテンには刺はなく、ピンク色または白みがかったピンク色の花をしていて、薄いバラ色の実がなる。古代メキシコのアステカ族は、ペヨーテを神聖な植物として崇拝していた。そのサボテンの表皮はとてすべすべして、指状のきれいな毛の美しい形状によってそれ自身の間で五から十二の部分に分かれる。(この文、要検討。… y tiene que de cinco a 12 lados que se separan entre sí, por líneas hermosas de dedos pelos llenos de belleza.)

ペヨーテの学術名は、アンハロニウム・ウィリアムシル ANHALONIUM WILLIAMSIL である。人間のパーソナリティーの解放に役立つペヨーテは、メキシコシティーやメキシコ州全域では見つからない。本物のペヨーテを見つけないなら、タラウマラ・インディオのいるチワワ州やサン・ルイス・ポトシ州、つまりメキシコ北部でさがさないといけない。その植物をかむとよい。熟れた新鮮なものがよく、乾いたのはもはや使えない。そのサボテンをかみながら、弟子は自分自身のインティモに集中する。とりもなおさず自分自身の内なる本質的存在に。このとき、ある神秘的な態度を取るとよい。内なる本質的存在は神自身であることを思い出そう。ペヨーテをかんでいる際、内なる神に集中しながら、うとうとする。そうすればパーソナリティーが解放されるだろう。そのときアストラル体で離脱するだろう。そのようにして自然界の高次元の物事を見、聞き、触れることができる。ペヨーテをかむことによって見るものは、無知な者が信じるような幻覚ではない。インテリは科学的根拠もないのに、それらの概念を決して認めようとはしない。インテリは四次元が存在することを知っている。教養ある人間なら誰もが、このことを知っている。

科学によって立証されたことであるが、我々の五感による知覚はすごく限られている。赤色の下には、全赤外線域があり、紫色の上には 全紫外線域がある。科学はこれを無視してはいない。水晶体の弾力性が失われると、うまいぐあいに物体の像を網膜の上に結ばなくなる。いわゆるピンぼけである。実際には、物体そのものではなく物体の像を知覚しているにすぎない。遠視では近くの物が見えにくく、近視では遠くの物が見えにくい。また色盲というものもある。物の色が混乱する色盲の原因は、網膜の炎症である。

要するに、人間の目というものは感覚で捕らえられる像しか知覚できない。それだけのことである。高次には超感覚的な像というのもあり、そうした像をキャッチするための感覚もある。ペヨーテを用いることによってその感覚が活動に入り、高次の像を知覚する。無知な人々の言うようにそれらの像が幻覚なら、網膜に結ばれ、感覚で捕らえられる像も幻覚のはずである。18世紀の唯物主義を卒業する必要がある。もっと分析的に、教条主義をより少なくして、さらに教育的にならないといけない。

物質とはエネルギーの凝縮したものである。エネルギーは様々な状態に凝縮する。現に五感による知覚を逃れるほど速いエネルギーの振動段階にある塊が存在する。

エネルギーの振動段階があまりに遅い塊があり、我々の感覚では知覚できない。

五感による外的な知覚の限界の上にも下にも、ふつう人間には知覚できない物理的塊が存在する。アストラル体の超常能力を使って初めて宇宙と生命の異次元を知覚できる。

たとえ一時的であるにしろ自然界の四次元で調査することを可能にしてくれる、そうした驚くべき能力を活動させる力がペヨーテにはある。

信じないという人が多くいる。信じる、信じないが、ここで問題なのではない。このような科学的な事柄で必要なのは論理的分析、狂信と偏見にとらわれない科学的調査、実験である。

人間のありとあらゆる隠された神秘を深く探求しないとイケない。科学の非妥協的な教条主義の中に閉じこもるのはよくない。よりいっそう捕らわれない態度で分析する必要がある。千五百万人ものイスラム教徒がロシア連邦の中心部にいるという事実が証明しているように、ソ連では唯物論はすでに失敗した。

高次の知覚は、通常の五感による知覚と同じく普通のことである。こうした知覚は、無知な人が信じるような、幻覚を起こさせる妄想ではない。病理学でいう強迫暗示とか、暗示にかかった狂信的で無知な人とか、そういった問題ではない。もっと研究し、ごう慢を慎むことが我々には必要である。高次の知覚は実在し、それを研究しないとイケない。

ハイチ共和国の未開人のインディオは、ブドゥー教の呪術・礼拝を行い、その黒魔術の実践と、知的教養がないゆえに批判することもできるが、実際には、論理的に正しくその過敏な知覚を判断できないようないかなる科学的根拠もない。数多くの心理現象の中には、けいれんを、熱狂的興奮を伴う精神の発作（精神の発作のすべての表現等にそれが見られる）が存在することは否定できない。超感覚的な知覚をする際の熱狂的興奮の発作、ハイチ人のいうロアの発作、こうこつを伴うけいれん性の発作。この発作は、科学にも精神医学そのものにも本当にまったく知られていない。知的なごう慢をわきへやるなら、感覚で捕らえられる人体現象、客観的な肉体状態は分析できても、公式科学には高次の知覚を申しぶんなく判断するにたる科学的権威はまだない、という結論に達する。

疑いの余地なく、狂信は理性と論理に対する最悪の敵である。大学関係者も狂信に陥る。

透視者と、こうこつを伴うけいれん性の発作をあざ笑うとき、発作中に見る幻がことごとく幻覚・精神錯乱等々であると信じるとき、本で読んだ理論に、インテレクトを形成する知的原理に操られた無知な狂信状態に、大学関係者のようにごう慢ゆえに陥る。

もし我々が他の無学な者たちの言うことを信じるなら、彼らの方も、自分では学問があると信じている我々のことを無学であるとみなせる。

我々は知識の主ではない。病理学でいう強迫暗示によって、インテリは我慢できないほどの狂信者になりうる。

ハイチの黒人は、ブドゥーの最中に透視力によって自然界の高次のとてつもない真実を透視する。あることを議論するには、まずそれを知る必要がある。批判の根拠となる十分な知識がないなら、批判の意見には何の価値もない。大学関係者はブドゥーを実践したことはなく、またブドゥーも知らない。したがって、批判の根拠となる十分な知識はない。

大学関係者は熱狂的な発作を起こしているブドゥーの信者たちを見ても、信者たちがトランス状態で見ているものが何もわからない。それらの有名な熱狂的発作を体験したことがないのだから。根拠となる十分な知識がないので、この場合彼らは根拠もなく意見を述べることしかできない。

前立腺チャクラの発達によって、すべての人間は意識をもってポジティブに幽体離脱ができるようになる。そのチャクラを開発することが大切なのである。

くりかえすが、信じる、信じないがここで問題なのではなく、研究し、分析し、実験することが重要なのである。

インテリが「それを信じない」と言うとき、自分が迷信深いということを物語っている。分析好きの研究熱心な教養人なら、こう言う。「私は研究するつもりだ、実験するつもりだ、分析するつもりだ」。

第十四章 睪丸と卵巣

睪丸と卵巣の内分泌液は、地球上にいる人間の生命にとって決定的である。男と女の基本的な性差は、睪丸と卵巣の分泌液に原因がある。

人類の生殖には、ただ一個の精子と一個の卵子があるだけでよい。それで十分である。実際には一個の精子だけが必要なのに、なぜ人間が楽しんで七百万個もの精子を射出するのか、その理由は科学的に解明されていない。卵子は大きく円形であり、卵黄のような厚い原形質で覆われたそれ自身の核を持つ。

精子は卵子と異なり、細長く、先のとがった楕円形の体をしていて、そこに基本的な核がある。そして魚のように一つの長い尾がある。

生命の水の中を泳ぐ女性の卵子の動きは遅く、男性の精子が自分を見つけるのを忍耐強く待ち構える。精子は魚の尾で性的な混沌の水の中を推進し、自分を待つ卵子を求めてはるかかなたへと航海する。

何が精子を卵子と受精させる原因の原因なのか、生物学者たちは科学的に正しくは知らない。それは科学にとって謎である。多少とも科学的な意見、仮説がいろいろ飛びかい、卵子の原形質には精子の原形質を大変引きつける化学的力があるなどと信じられている。それらは皆仮説であり、仮説以上の何ものでもない。その仮説が正しかったとしても、それでも謎は解明されないだろう。意識ある基本原理がなく化学作用のみがあると論理的に認めることはできないだろう。卵子の原形質から卵子のエネルギー論へと移ろう。論理をたどれば、卵子に向かう引力の磁場のようなエネルギーを認めざるをえない。また、精子を卵子に向けて推進させる動的な力のような電気を論理的に認めざるをえない。手短かに言えば、原子とはエネルギーの代表者なのである。あらゆる原形質の電磁氣的な力は、一つ

の途方もない現実である。万物は放射する。現象のしくみを認めるだけでなく、そのしくみを支配する法則という本体を解明する必要がある。

事実、宇宙意識は精子と卵子を受精させる原初の知性である。同様に知性ある原因なくして知性ある現象を認めるわけにはいかない。事実は事実であり、事実の前に降参しないといけない。

ノスティックは第三ロゴスについて語る。科学は、第三ロゴスがまさしく最初の知性であることを知るべきである。第三ロゴスは一個人ではない。ノスティックの言う第三ロゴスは、自然の最初の知性である。

第三ロゴスの創造エネルギーは、精子を卵子と結ぶ自然の最初の知性であり、ポジティブとネガティブに分極する。

精子は第三ロゴスのポジティブな力の典型であり、卵子はネガティブな力の典型である。そのエネルギーの二極が創造のために結びつく。法は法である。

精子が卵子の中に入るとき、洗礼者ヨハネの斬首を経験する。

ダーウィンの進化論を信じる唯物論者達は、人間を含めて動物達の胚の段階が似ていることを示して、劣った、より単純な種、生き物が進化し変化して、優れた、より複雑な生き物が生まれたことを証明しようとする。

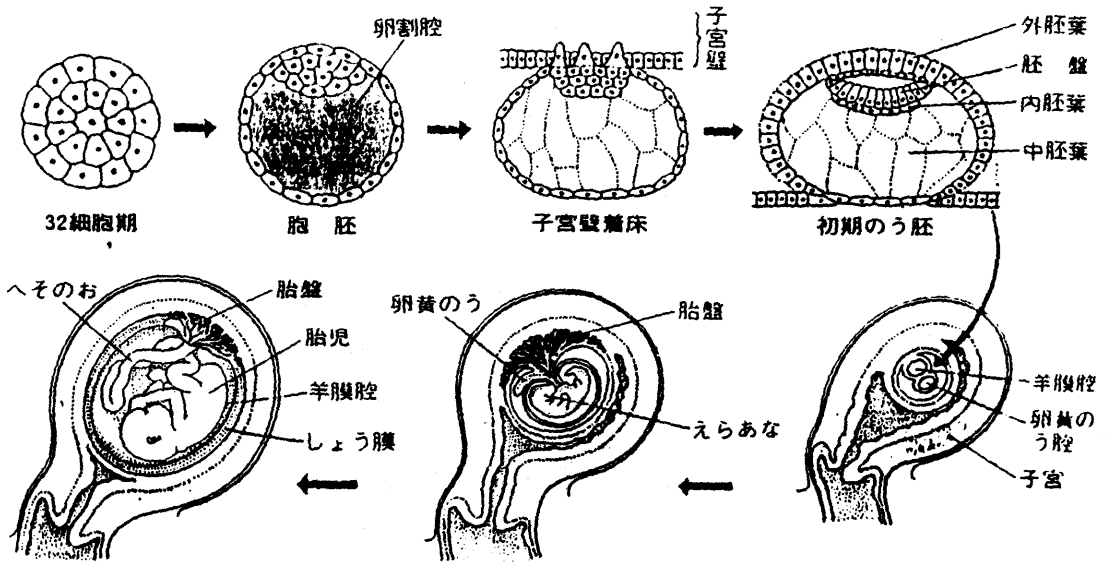
我々ノスティックの考えでは、人間を含めて動物達の胚の段階が似ていることから、二つのことが十二分に証明される。生命が単一であること、および根源の種子である。カオス（混沌）の中で、存在するものすべての種子は、偉大な普遍的生命の精液の多数の原子に包まれて根源の種子のように眠る。

第三ロゴスの創造エネルギーは、生命の水（普遍的な精液）を受胎させ、あらゆる存在の胚芽を発生させる。

種は、それぞれ根源のカオスの中に一つの普遍的な原型を持っている。有名な胞胚の中には三層のまったく異なった細胞がある。第一層は内胚葉、第二層は中胚葉、第三層は外胚葉である。

受精卵は体細胞分裂によって増殖し、胞胚と呼ばれる細胞群を形成する。精子と卵子のゼリー状態は、宇宙の始めには生命は精妙かつ流動性でゼラチン状だったのが、後に粗雑で堅くなったことを証明している。我々にはマヤ・インディオ達が崇拜する大亀が思い出される。宇宙の始めは精妙でゼラチン状だが、その後は、いろいろな星座と世界でみちた

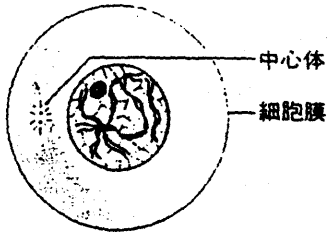
ヒトの初期発生と胎盤形成の過程(模式図)



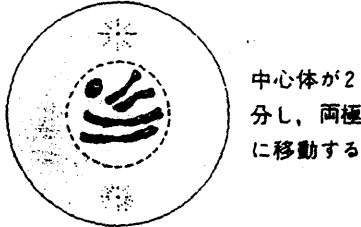
体細胞分裂

動物細胞

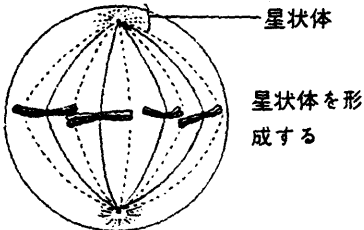
中間期 (静止期)
分裂に先立ってDNAの複製が起こる



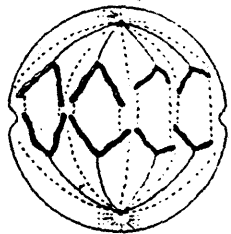
前期
染色体が形成される。染色体は縦裂して2本の染色分体になっている。仁・核膜は細胞質中に分散し、核は紡錘体となる



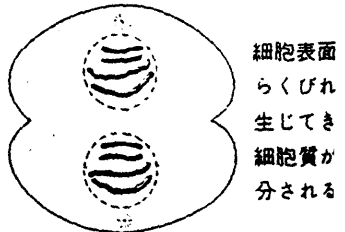
中期
染色体が赤道面に並ぶ。動原体に紡錘糸が付着する



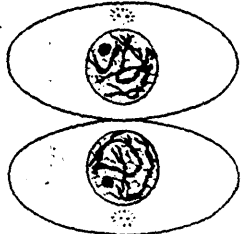
後期
縦裂した染色体が紡錘糸により両極へ移動する



終期
前期の過程を逆にたどるように、仁・核膜が形成され、染色体は染色糸になる。2個の娘細胞が形成される



中間期
娘細胞は成長し、一定の大きさに達すると、DNAが複製され、次の分裂が準備される
染色体数 4 (2n=4)



堅い甲羅のように見える。上にあるがごとく下もある。幸いなことにソ連の科学者たちは原形質状の諸世界を発見した。

精子と卵子は人間の霊の新しい乗り物になる前に、進化と成長の過程を通らねばならない。卵子—精子の成熟する内的原因は、生物学にはまったく知られていない。

原形質状宇宙の成熟する根本的原因は、天文学や宇宙物理学にとって謎である。とても興味深いではないか、科学者たちは染色体のあの謎を解明するのである。どうして卵子の染色体の数が48だけなのか。どうして精子の染色体の数も48なのか。謎！謎！謎！

精子と卵子が成熟する間、数学的にどちらも24というまったく同数の染色体に減少する奥深い理由は何なのか。それほどまでに完璧な数学的計算をわざわざするのは誰なのか。

成熟した精子と卵子が受精する際、どうして再びもとの同数の48の染色体にどちらもなるのか。

ここには二つの数学的演算—足し算と引き算がある。もととなる数は48である。数学を理解する知性なくして数学的演算がありえようか。このことすべてが、簡単な帰納により自然の最初の知性が実在することを証明している。我々ノスティックは、その知性を第三ロゴスと呼ぶ。

精子と卵子が受精した後、子宮に九ヶ月間宿る。精子と卵子の細胞には二つの核がある。一つは精子の核（精核）で、もう一つは卵子の核（卵核）である。これら二つの核はたくみに結合する。二つの核の原形質は融合する。卵子—精子の細胞内には引力圏が一箇所ある。その偉大な引力圏も、最初の知性に従って両極に分かれる。その引力圏の二つの極性は、おのおの核を引っ張って伸ばし、球形から紡錘形に変える。核の紡錘形の中心には染色体と遺伝子が混ざっているのが見られる。遺伝子は同じ染色体の中にある。遺伝子によって両親から胎児に遺伝が起こる。

けれども人間が受けるものすべてが遺伝によるわけではない。徳の高い家系から恐ろしい殺人犯人が生まれてきた。平凡な家系から大天才が生まれてきたこともある！

もし透視者が、すでに成熟して卵子に向かう精子を調査すれば、精子の頭部に非常に重要な原子を一個見ることができる。精液（種子）の原子である。その原子は物質とエネルギー—意識の三つ組である。その原子から一本のごく細い糸が伸びていて、合計でいくらかの、自然のエネルギー的な価値に結ばれている。それらの価値とは本質的存在、霊のことである。

我々は一定の合計を持つ自然の価値にとって乗り物として機能する、空間内の点である。

死とは分数の引き算である。引き算がされて「価値」が残る。

自然の価値は電磁氣的である。価値は、生物学に注意深く従う新しい生物学的過程によって、既に死んだ肉体を取りかえる。これが生まれ変わりの法則である。法は法である。法は果たされる。

卵子-精子の物質的原子の中にはエネルギーがある。そのエネルギーは組織される。そのエネルギー的組織体がムミア〔生命体のこと、第十章「脾臓」参照〕である。ムミアの各原子の中にはアストラル体の原子がある。アストラル体内には自然の意識の価値がある。(我々は神智学の語る人間の七重の構成を知っているが、ここでは総合している。)

我々は教義をうち立てているのではない。分析しているのであり、科学はすでにアストラル体をいくつかの実験室で物質化できた。事実は事実であり、事実の前に降参しないといけない。

各人の美德と欠点は、その人物に生まれ変わる価値の質による。ムーア人がスペインを支配した時代、『コーラン』を勉強していた、ムーア人の非キリスト教の隠者がいた。その托鉢僧はムーア人の占領中スペインにいて、『コーラン』を読み、『聖書』を勉強したが、その知識は消化不良に終わり、教義に対する懐疑にみたされた。

*ムーア人…北アフリカのモロッコ原住民のベルベル人。アラビア人の侵入でイスラム化し、711年彼らと共にイベリア半島に侵入し、後ウマイヤ朝の基礎を築く。1492年まで半島を支配した。

その人は懐疑にみたされたまま亡くなった。彼の価値はボルテールという名の人物に生まれ変わった。誰もが透視力を開発でき、意識の価値が時間と空間を通して進化していくのを見ることができる。

*ボルテール 1694-1778…フランス啓蒙主義の代表的な文学者、哲学者。

クルム・ヘラー博士が言及するアメリカの偉大な生理学者ブラウン・セカードは、多くの人が不道徳であると評価する治療法を発見した。クルム・ヘラーの触れたその方法は、精液をこぼさずに性器を興奮させることにある。この場合、精液は脳化され、脳は精液化される。そのようにして精液は有機体内に吸収され、神経系は十分に栄養を受け取り、強化される。この方法は種の生殖に障害とはならないだろう。一個の精子は、一回の射精で失われる七百万個もの精子をこぼさなくても、容易に体内から抜け出る。

ブラウン・セカードの方法は、イタリアではカレッザ caretza という名で知られている。これがアルカーノ A. Z. F.である。

*カレッザ…「保留性交」と訳される。タランタ經典に出てヨガに残る方法。途中で動きを止めて時間をかけることによって深い満足が得られるとされる。米国ニューヨーク州

のオナイダ共同村（1848-79）で啓蒙推進されたことでも有名。

クルム・ヘラー博士は、この方法で性的不能症（インポテンツ）は治療できると語る。

小説『バラ十字』の174ページで、クルム・ヘラー博士はこう述べている。「バラ十字思想を学習することにより以下のことを学ぶことができる。精液は人間のアストラル液であり、命であり、パワーを、それも巨大なパワーを秘めているということ。しかも精液の使い方を知れば、どんなことも成しとげられるということ。だからバラ十字の秘密を知ることとはとても重要なのである、逆境に対して強力な武器を所有するのだから」。

172ページではこう述べている。「バラ十字の魔術師は精液を操作するときには、欲望だらけの他の人間と同じように神経の高ぶりを感じる。もし人間がこの興奮のいつとき自分にできることを知ったなら、確かにいかなることも行えるのだが、女を追うことを除いて」。

古代メキシコのアステカの賢者たちは、その興奮の瞬間にできることを熟知していた。アステカの神殿の石畳の中庭では、男と女は、まる数ヵ月間というもの愛し合い、性的に交わりながら裸のままだった。

それらのカップルは精液の射出を避けるために、オルガスムスの前に身をひくことができた。すばらしい精液を体外に漏らすのを許さなかったのである。これが有名なイタリアのカレッザ、アメリカの偉大な生理学者ブラウン・セカードの方法である。この方法によってクンダリニーを覚醒させることができる。確かに医師はメスによってはクンダリニーを発見できないだろうが、ノスティック・バラ十字のプラクティスを実践するなら透視者になるだろう。透視力のある医師なら皆クンダリニーを見ることができる。

クンダリニーはアステカ族のケツァルコアトルの蛇、聖霊の火、魔力を持つ火の蛇である。

透視力を持つヨギは、ちょうど性器と肛門の間にある、四枚のすばらしい花びらを持つハスの花を霊視する。

それがエペソの、ムーラダーラ・チャクラの教会である。そのチャクラの中にクンダリニーがある。聖なる蛇の形をしている太陽の精神的な火、クンダリニーは透視力によってのみ見ることができ、物質ではないのでメスでは見つけられない。

クンダリニーはアーカーシャの集中したものである。アーカーシャはエーテルの原因、そして音の作因〔音を起こさせる力〕である。脊髄の中央管を通してアーカーシャの蛇を上昇させる者だけが、言葉を具現できる。

クンダリニーは太陽ロゴスのオーラの中で発達し、進化し、進歩する。

性器のチャクラはタットワ・プリトヴィー（石のエーテル）の座である。タットワ・プリトヴィーを操作する者は地震を支配できる。

脊髄には七つの磁気中枢があり、大交感神経系の七つの重要な叢〔神経・血管などの網状構造〕と結びついている。これら七つの中枢にはタットワのすべてのパワーがある。燃え上がるアーカーシャは脊髄の七つのタットワ中枢を開く。そのとき我々はタットワを支配するマスターとなる。

脊髄の最初の磁気中枢はタットワ・プリトヴィー、性のパワーの座である。第二中枢は前立腺チャクラに対応する。タットワ・アパス（水）、液体エーテルの教会である。第三中枢はへその高さであり、太陽神経叢と関連する。それはタットワ・テジャス（火のエーテル）、普遍的な火の教会である。脊髄の第四中枢は心臓チャクラに対応する。タットワ・ヴァーユ（気体エーテル）の聖なる座である。以上は人間という神殿の下位の四つのタットワ中枢である。

神殿の塔は首と頭に他ならない。塔には上位の三つのタットワ中枢が位置する。第五中枢は喉頭チャクラ、言葉の教会である。アーカーシャがなければ音は存在できない。クンダリニーは言葉によって創造的になる。第六磁気中枢は額チャクラと関係する。クンダリニーがその透視力の中枢を開くと、人間は透視者になり、高次元の世界を見ることが出来る。第七のタットワ中枢、それは松果腺に位置する千枚の花びらを持つチャクラである。クンダリニーがこのチャクラを開くとき、ポリビジョン〔直観的超視覚〕、全知などを授かる。ブラウン・セカードの方法によってこれらすべてのパワーは自分のものとなる、生涯決して射精しないという条件で。ブラウン・セカードの方法とはアルカーノ A. Z. F.である。

フランシスコ・A・プロバト博士が言及する北アフリカの叡智あるカバリスト、マンリー・P・ホールは、神秘解剖学に関するその著作でこう言っている。「脊髄の火をスシュムナー管を通して上昇させることのできない者は、現代の猿（クモザル、オオナガザルなど）のそれと似た傍系の王国に投げこまれるだろう。」（スシュムナー管は脊髄に沿ってその中を走っている。）

*マスター・ルクセミル Luxemil は現世での名前をフランシスコ・プロバトといった。

彼のことをマスター・サマエルは、復活したマスターにはさしあたり達しなかったとはいえ「真実の人間」に上昇したと言っている。（アルゼンチンに住んでいて、その著作でマスター・サマエルに協力した。）（『ノーシス秘教辞典』より）

アルカーノ A. Z. F. は合法的に家庭を営む夫婦の間でのみ行うべきである。妻以外の女性とアルカーノ A. Z. F. を行う男性は、姦通という重い罪を犯すことになる。

姦通する男性は決してクンダリニーとタットワのパワーを目覚めさせることはできないだろう。（このことは女性にもあてはまる。不倫の関係を結ぶ女性も、絶対クンダリニーとタットワのパワーを目覚めさせることはできないだろう。）姦通するノスティック・イニシエイトは男女とも自分のパワーを失うのである。

神はインティモである。神は生まれてくるあらゆる人間の内なる存在である。神は聖なる両性具有、男女（おめ）であり、自分の火をつけるのに妻はいらないが、人間は神ではない。男性は女性がいなければ火をつけることはできない。人間は神ではないので自分の火をつけるのに妻が本当に必要なのである。

人間は自分を神だと信じる傲慢を捨てないといけない、地上の泥の中をはいずり回るただの哀れなミミズにすぎないのだから。

偉大な女ヨギ、H. P. ブラバツキーはブラバツキー伯爵の未亡人となった後、クンダリニーを目覚めさせタットワのパワーを得るために、オルコット大佐と結婚しなければならなかった。

チベットの聖なる教団では弟子にアルカーノ A. Z. F. が教えられる。

エジプトの密儀ではアルカーノ A. Z. F. がイニシエイト全員に教えられていたが、グラン・アルカーノを漏らした者は死の罰を受け、中庭につれていかれ、そこで壁にもたれさせられて首を切られ、心臓は引きちぎられて、その灰は四方八方に捨てられた。

アステカ族の中庭では男女は裸のまま、まる数ヶ月間アルカーノ A. Z. F. を実践した。不幸にも精液の実体を射出するにいたった者は、神殿を冒瀆したかどで死の罰に処せられ、首を切られるのが常であった。

いつの時代でも密儀スクールのイニシエイトたちは、グラン・アルカーノと共にイニシエーションを受けた。アルカーノ A. Z. F. （これがグラン・アルカーノである）のないイニシエーションを受けたイニシエイトの知られた密儀スクールなど絶対になかった。

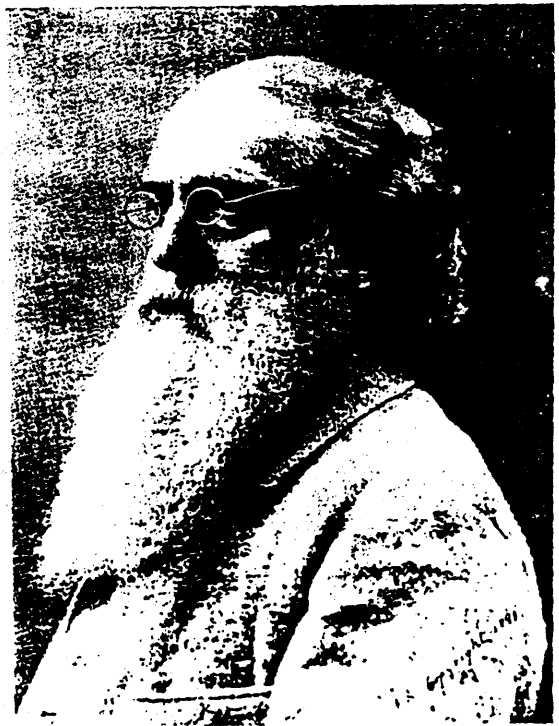
あるとき講演終了後、独身の一人の弟子が、アストラル界の女性と実践できるかどうか我々に質問していた。生身の体を持つ女性との実践によってのみクンダリニーを目覚めさせることができる、我々はそう答えた。別の独身の兄弟は想像上の女性と実践したがっていた。だが、それは非常にゆゆしきことである！マインドが一つの心像をつくると、その像は意識を得、メンタル界の誘惑する一匹の悪魔になり、睡眠中、夢精によって性的に我々を放電させる。

学徒がそれらの心像を崩壊させるのはとても困難である。たいていは自分自身の発明品



ブラバツキー夫人

1831-91



ヘンリー・スティール・オルコット大佐

1832-1907

エレナ・ペトロブナ・ブラバツキー (Helene Petrovna Blavatsky) …ロシア生まれ。超視覚を始めとするいろいろな超能力を持つマスター。1831年オルコット大佐と神智学協会を創立。最初の夫ブラバツキー伯爵とは結婚生活をしなかった。未亡人となった後、すでに年をとっていたが晩年、完全な自己実現をとげるためにオルコット大佐と結婚した。男性の肉体をまとってニューヨークにもう一度生まれ、ある使命を果たすだろう。マスター・サマエルは彼女の著作『シークレット・ドクトリン (秘密の教義)』と『ペールをはいだイシス』をほめたたえている。(『ノーシス秘教辞典』より)



マンリー・パルマー・ホール (Manly Palmer Hall) …1901年カナダ生まれ。ルドルフ・シュタイナー (1861-1925) の弟子マックス・ハインデル (1865-1919) に若くして師事し、その「カリフォルニア薔薇十字協会」に入る。1936年ロサンゼルスに「哲学探究協会」を創設、古今東西の秘教の伝統に関する数々の出版・講演活動を行う。

の犠牲になってしまう。一番いいのは本当に大作業に協力してくれる妻をめとることである。

妻のいない男性は野外スポーツ、すばらしいハイキング、遠足、水泳、いい音楽の鑑賞、見事な芸術作品の鑑賞、彫刻、絵画、クラシック音楽等により創造エネルギーを昇華すべきである。

そのようにして独身者は性エネルギーを心臓まで昇華する。そこ生命の中枢で、それらの創造的な力は内なるクリストの輝かしい波動と混じり合い、偉大な光の、言葉では言えない領域に導かれる。

美意識により、あるいは慈悲と愛により性エネルギーは昇華される。けれども、真理の名にかけて次のように断言せねばならない。もしあなたがたがイニシエーションを望み、クンダリーニ覚醒とタットワのパワーを熱望するなら、妻をめとる必要がある。妻のいないイニシエイトは、水のない庭のようだからである。

神秘学徒の中には、妻を持たないので自分は純潔だと信じる者が多くいる。しかし、あげくのはてに夢精をしてしまう。そのようにして哀れにもクリストニックな精液（そこには偉大な生命の起源がある）を失うのである。

あらゆる植物、動物、人間の種子には太陽ロゴス（クリスト）の聖なる火が潜んでいる。そのため種子には子を生んで再生するパワーがある。人間は「飲む黄金」として精液、種子を大切に扱うべきである。アルカーノ A. Z. F. によって種子からクンダリーニの聖なる火を勇ましく取り出すのである。

夢精はアルカーノ A. Z. F. によって根本的に治療できる。

アルカーノ A. Z. F. によってのみ夢精は永久になくなる。

我々は一人の男性と一人の女性の子である。我々は決して理論ではない。「ことば」、「人の子」、それは男と女から生まれた子である。無原罪の御宿り〔聖母マリアがその母アンナに宿った瞬間から原罪を免れていたこと〕の子。「人の子」を我々自身の内で上昇させる必要があり、女性が必要である。